

ラテン化新文字運動の始動

——倪海曙の編年史叙述の検討とエスペラント要因

都 留 俊太郎

はじめに	415
I 倪海曙と資料編纂	417
II 強調された瞿秋白の貢献	421
III 諸方言のローマ字化にかんする記述	425
IV 左派エスペラント運動の形成	428
V ウクライナから中国への情報の到達	434
VI 連鎖する書記言語の試み	439
結びにかえて	443

はじめに

20世紀の中国では、言語・文字改革にかんする多種多様な実践が試みられた。そのなかには、白話文運動や簡体字の制定のように現在の中国語にまで受け継がれたものもある。しかし、大半は考案、あるいは限られた人びとの利用にとどまり、まもなく消えていった。挫折した試みを同時代の文脈に即して検討することで、新たな言葉に寄せられていた期待、そして今日では想像しがたい言葉の地平を照らし出せるのではないか。

1930年代に中国国内で一定の支持を得たラテン化新文字運動は、そうした改革の試みのなかでも比較的によく知られている。国民政府が公布した国語ローマ字とは別系統の中国語ローマ字表記システムとして、ソ連で創案されたのが発端である。漢字のかわりに、大衆が読み書きするための新たな文字として、中国の左派知識人によって推進された。標準語ではなく諸方言の書記を目指したこと、声調を表記しなかったことなどをその特徴として指摘できる。運動は1950年代なかばまで継続したが、普通話政策・ピンインの確定とともに、その活動を停止した。

本研究の目的は、倪海曙が編纂したラテン化新文字運動史の基礎資料を批判的に検討したうえで、エスペ란ティストたちが運動の始動において果たした役割を明らかにすることである。運動の当事者であった倪の著作は、その後の研究に大きな影響を与えてきた。特に、充実した内容をもって知られるのが、晩年に刊行された編年史の著作『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』（1987年）である。同書は、他の当事者からも「ラテン化新文字運動にかんする最も忠実な記録⁽¹⁾」として参照されており、運動史の叙述を今日にいたるまで規定しつづけている⁽²⁾。しかし実際には、倪の一連の資料は出版時の運動の方針や、倪と運動を取り巻く政治状況に対応するかたちで編纂されている。有用な記述も多数含まれているが、十分に吟味することなく利用すると、歪められた運動史像を再生産してしまうことになる。本論文の前半部（Ⅰ～Ⅲ）では、『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』および、その原型となった『中国字拉丁化運動年表』の編纂の経緯を分析する。倪の編年史叙述の特徴と偏りを明らかにする。

本論文の後半部（Ⅳ～Ⅵ）では、倪の編年史において過少に評価されていた、上海・漢口の左派エスペ란ティストたちの活動を検討する。エスペ란ティストとは、エスペラント語を使用する者のことである。1920年代末以後、ソ連および日本の影響を受けて、中国でも左派エスペラント運動が形成されていった。ソ連で創案されたラテン化新文字の情報・資料は、左派エスペラント運動の文脈を介して中国に到達する。ソ連（ウクライナ）と日本における書記言語の改革をめぐる実践と接続しながら、中国のエスペ란ティストたちがいかにラテン化新文字運動を始動させたか跡づける。倪の資料に依拠する先行研究は、国語ローマ字運動との対立関係に注目してきた。それに対して本論文では、エスペラント要因に着目し、国境を越えた水平的なつながりのもとで新文字運動をとらえなおす。

なお、ラテン化新文字の運動家たちは、その由来であるソ連のラテン文字化運動にならって、ローマ字化のことを「ラテン化」と呼んだ。この呼称は、対立する国語ローマ字運動との差異を明示するうえで、重要な符号となった。しかし、本論文は国語ローマ字運動との対立を主題とするわけではない。したがって、それぞれの表記システム（例えば、北方話ラテン化新文字）の名称に言及する場合、および特に必要な際にかぎり、「ラテン化」という表現を用いる。また、ラテン化新文字運動について、以下では「新文字運動」と略称する。加えて、エスペラント運動の団体名については、当時から決まった略称が存在している。それらの略称については、本論文の末尾にまとめたので、必要に応じて参照されたい。

I 倪海曙と資料編纂

新文字運動の歴史を論じるにあたり、倪海曙（生没年：1918–1988）が編纂した資料の重要性はいくら強調してもしすぎることはない。倪は運動の指導者のひとりであると同時に、運動にかかわる資料の編纂を担った人物でもあった。その最も重要な成果は、冒頭に述べた『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』であったが、ほかにも『中国拼音文字運動史簡編』、『拉丁化新文字概論』、『中国語文的新生』など、後の研究の基礎となる資料を刊行している。DeFrancis、大原信一の古典的研究から、近年の王東傑、湛小白の研究にいたるまで、倪の資料に依拠しなかった運動史研究はほぼ存在しない。

まず、倪海曙の経歴と彼が従事した編纂作業を概観しておく⁽³⁾。倪は1918年に上海に生まれ、初・中等教育を受けたのち、35年に震旦大学医学部に入学した。のちに新文字運動に参加するとはいえ、言語・文学にかんする専門的な素養をそもそも有していたわけではない。盧溝橋事件ののち、上海にも戦火が拡大すると、倪は赤十字国際委員会の難民収容所に勤務した。運動を牽引していた上海新文字研究会が租界で活動を再開するなかで、37年10月、倪は新文字師資訓練班に参加し、江南（上海）話ラテン化新文字と北方話ラテン化新文字⁽⁴⁾を学習するにいたった⁽⁵⁾。翌月には難民収容所で新文字班を運営し、上海新文字研究会に加わっている。

倪は比較的遅くに運動に参加した人物であった。ソ連領内の中国人労働者への普及を目的として北方話ラテン化新文字が創案されたのは、1920年代末から30年代初頭のことである。そして、エスペランティストの情報伝達を介して中国でこれが受容され始めたのは32–33年頃、大衆語論戦をきっかけとして、国内で諸方言のローマ字表記が創案されて運動が盛んだったのは34–37年頃であった。中国国内の初期の新文字運動は主にエスペランティストによって担われた。しかし、途中からエスペラント語を学んだ経験がなく、ラテン化新文字にしか関心を持たない者も運動に参加するようになったという⁽⁶⁾。倪はそのように遅れて参入した、非エスペランティストの新文字運動家であった。

また、新文字運動は総じて左派の知識層によって担われたといえるが、倪の政治的立場にも遠からぬものがあつた。1938年5月には上海新文字研究会内に中国共産党小組が組織され、翌月、倪は入党している。39年9月に倪は故あって共産党から退党しているが、左派的な立場は一貫したものだつたようである。

1938年頃には早くも上海新文字研究会の常務理事に選出されるが、若干二十歳の倪が運動の指導層に加わられた背景には、陳望道（生没年：1891–1977）の存在があつたとみてよい。陳は『中国共産党宣言』の翻訳や修辞学の著作で知られるが、新文字運動に早くから

関心を寄せた人物でもあった。特に1938年から40年にかけて、ラテン化新文字の表記法や中国の表音文字の変遷にかんする論考を相次いで発表し、運動を理論面で支える役割を果たした⁽⁷⁾。倪は38年初めに上海文化界救亡協会が運営した夜間大学で陳の授業を受講したことをきっかけに、陳に師事していた。翌年春には復旦大学中文系に転学し、言語学・文字学・音韻学を学んでいるが、これも陳の推薦によるものだったという。新文字の普及活動じたいは、倪も含めてしばしば中国語学や言語学の知識を十分に持たぬ者たちが担っていた。倪は、そうした運動家たちと理論家の陳をつなぐ連絡役を務めたのであった⁽⁸⁾。

倪と資料編纂のかかわりは、この頃にすでに始まっている。それも陳望道の影響によるものであったことは想像に難くない。1938年秋には新文字運動にかんする資料を収集し始めたとされるが⁽⁹⁾、運動を宣伝する展覧会の素材を集めることが当初の主な目標であったようである。39年に上海語文教育学会によって開催された中国語文展覧会は、特に規模が大きかったとされる。その企画者は陳望道、準備の責任者は倪が務めている⁽¹⁰⁾。

そうして収集した資料をもとに編纂されたのが、倪の編年史の最初の成果、『中国字拉丁化運動年表——1605-1940』（上海：中国拉丁化書店、1941年。以下『1941年表』と略す）である。ここでは、陳の影響をさらに顕著にみることができる。序文によれば、倪は当初は1929年から執筆時までの新文字運動史を記録するはずであった。ソ連にいた瞿秋白らによるローマ字表記の創案を画期として書き起こすつもりだったのだろう。しかし、ラテン化新文字は実際には「数百年来、すくなくとも百年来の古いテーマを引き継いだ新たな文章である」という陳望道の主張を受け入れて、先行する表音文字化の運動との連続性を重視するにいたった⁽¹¹⁾。そこで、大きく遡って、17世紀の宣教師によるローマ字化の試みから、年表の叙述を始めたとする。結果、165頁にわたる同書の編年史叙述のうち、冒頭の約50頁では新文字運動以前の表音文字導入の試みが跡づけられている。上記の陳の一文は巻頭にも掲げられており、重要な示唆を与えたことをうかがわせる。もとより、陳の支持なくしては、後から運動に参加し、中国語学・言語学の素養も乏しかった倪が執筆を担当することは困難だっただろう。

日中戦争の終結後、倪は時代日報の副刊「新語文」・「方言文学」を編集し、戦時下で停滞していた新文字運動を復興すべく論説を発表していった。1948年から49年にかけて、『中国拼音文字運動史簡編』、『中国語文的新生』、『魯迅論語文改革』などの著作・資料集も相次いで刊行している。また、49年には、国内の運動の中心となる上海新文字工作者協会が創立され、副主席に就任する。主席となったのは陳望道であったから、引き続き陳の影響下にあったとみてよい。もっとも、この頃には新文字運動は実質的に倪によって牽引され、運動の指導者になっていたといえる。運動自体は、30年代の勢力を回復することなく縮小

傾向にあった。1955年の全国文字改革会議をへて普通話政策が確定し、今日の「ピンイン」が公布されることになった。これを契機として、運動には終止符が打たれた。

政府による文字改革の試みはその後も継続したが、倪はそれにかかわり、特に資料の編纂を担った。たとえば、1955年の中国文字改革文献資料展覧会は、倪が資料の収集および企画を担当している。また、56年には政府の中国文字改革委員会に附属する文字改革出版社が創立され、倪はその責任者となった。資料編纂の能力・経験をもって、体制のなかに居場所を確保したといえる。以後、文字改革およびその歴史にかんする資料集の編纂に従事し、『拼音文字写法資料選輯』、『清末文字改革文集』、『清末漢語拼音運動編年史』などを刊行している。文化大革命期には厳しく糾弾され、下放も経験したが、70年代後半には再び政権の普通話政策に協力した。そして、晩年は病を抱えながら、新文字運動にかんする編年史の決定版というべき『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』（上海：知識出版社、1987年、以下、『編年紀事』）を刊行し、まもなく逝去した。

『編年紀事』は、倪の渾身の著作であった。そのことは、出版までに繰り返された改訂の過程からもうかがうことができる。『1941年表』が原型となったが、1957-58年には、運動の終了（55年）までの記録を大幅に増補した新版の初稿が完成したとされる。おそらくこの初稿において、『1941年表』に含まれていた新文字運動以前にかんする記述は分離されたであろう。さらに、59-60年には二稿、61-62年には三稿が完成、そして63-64年に第一次改訂がおこなわれた。その後、文化大革命期に数千冊の蔵書と収集してきた多くの資料は廃棄されてしまい、編纂作業が困難になったが、75年には第二次改訂、76年には索引が完成したという⁽¹²⁾。79年には『拉丁化新文字運動的編年紀事』が中国人民大学語言文字研究所より刊行された。87年に刊行された『編年紀事』については、編年史の記述と索引は79年に刊行された版とほぼ同様であるが、冒頭に計35頁の解説「拉丁化新文字運動的始末」、および葉籟士の序文が付された。倪は多数の著作と資料集を出版したが、刊行までにこれほど改訂を繰り返した作品はほかにない。

そして、計439頁、43万5000字にわたる充実した内容こそが、『編年紀事』を新文字運動史の基礎資料たらしめてきたのであった。内容を一瞥しておくとして、まず冒頭の50頁程度で、運動を時期区分して説明し、さらに北方話・江南話・広州話・厦門話それぞれのラテン化新文字の表記法を紹介する。続いて、300頁強にわたり、1928年から55年まで各月ごと、そして下位区分として各地域ごとに、出来事を記載する。特に、重要な論説や文章、綱領などが発表された場合には、必要な部分を抜き書きして掲載している。加えて、70頁以上にわたる詳細な索引が付されているのが特徴である。人名、組織名、書名、雑誌名、記事名に分類して整理されている。青年時代から晩年にいたるまで、資料の収集・編纂・

展示に継続的に従事してきた倪の本領が発揮された作品であった。

留意すべきは、倪が刊行した一連の資料が、新文字運動の実践上の需要や出版時の政治状況に対応するかたちで編纂されていたことである。1949年9月に上海新文字工作者協会の成立大会が開かれたが、倪が提案した活動計画では、すでに以下のように述べられていた。

この計画は主に出版、教育、組織、研究の4つの部分より構成される。出版については、私たちは二種類の刊行物、五種類の読み物、七種類の教科書、五種類の理論的著作、四種類の工具書の出版を予定している。…(中略)…新文字にかんする五種類の理論的著作というのは、新文字理論の小冊子、中国の言葉と文字の改革運動史(表音文字運動史、漢字改良運動史、文語の口語化運動史、口語の共通化運動史の四冊)、中国の言葉と文字の改革運動の文献(教会ローマ字運動、切音字運動、注音字母運動、国語ローマ字運動、ラテン化新文字運動の五冊)、新文字専門研究叢書(分ち書き研究、方案研究、同音異義語研究、各理論問題の研究など)、各派の言葉と文字の改革にかんする論文集である。⁽¹³⁾

多岐にわたる書籍・冊子の刊行を予定していたことから明らかなように、運動の核心は出版事業にあった。そして、運動史をふくむ関連資料集の編纂は、教科書や読み物の出版とあわせて、運動の一角を構成していたのである。また、遡って1941年に、倪は『反対拉丁化的十種「理由」』(化文出版社)を刊行している。同書は運動に対する様々な批判が誤解であるとし、それまでに刊行されていた資料・文献を縦横に引用して反駁する内容であった。運動史の編纂が担っていたのは、過去の活動の記録だけではなかった。運動の正当性を示す材料を整理し、提示することも期待されていたのである。

さらに、倪が新文字運動の終了後に編纂した資料については、すでに政府によって否定された運動としての政治的位置が反映された。たとえば、『編年紀事』の冒頭の「拉丁化新文字運動的始末」では、1949年以後の運動について、以下のように記している(32頁)。

…ラテン化新文字はもはや推進される必要はなくなっていた。しかし、この運動はかつて共産党によって提唱されたため、群衆は当初、言語政策の変更を了解しておらず、解放初期には各地で依然として積極的に推進された。

この記述は、時の政治状況から離れて運動を回顧することの難しさを示している。前述の

とおり、倪は人民共和国の成立以後も、新文字運動の指導者として精力的に活動し、多くの著作を発表した。『編年紀事』における1949年から55年の項の分厚い叙述は、その証にほかならない。しかし、出版時（1987年）には普通話政策が推進されており、倪もこれに参与していた。そうした政治的脈絡と立場にあって、過去の自らの運動を不要なものとして否定することは、不可欠な作業だったようである。

特に倪は、言語政策の推進にかかわる一方で、共産党から退党した経歴ゆえに冷遇されがちでもあった⁽¹⁴⁾。過去をめぐる言論の困難にはひとときわ厳しいものがあったと考えられる。

II 強調された瞿秋白の貢献

倪が編纂した資料については、ソ連の中国学者であるシュプリンツィン（A. G. Shprintsin、史萍青、生没年：1907-1974）によって、控えめながら早くから指摘がなされていた。シュプリンツィンは、1930年代前半にソ連における中国語のローマ字化（北方話ラテン化新文字）の研究と普及に協力したことで知られる。彼が1961年にモスクワで発表した論考は、まもなく「関於中国新文字歴史的一章（1928-1931）」として、『文字改革』第9・10期（1962年）に訳載された。ソ連における中国語のローマ字化の創案・普及の経緯について、それまで中国では十分に知られておらず、貴重な内容であったといえる。

論考の脚注には、倪の著作に言及する以下の記述がある。

中国の一部の著者は、瞿秋白同志が早くも1921年にソ連にいた時、中国語の表音文字の問題にかんする研究に従事したとする（たとえば、倪海曙『中国拼音文字運動史簡編』、周有光「漢字改革運動的歴史発展」『中国語文』1960年第3期、120頁）。しかし、これらの見解には、根拠となる文書がないようである。⁽¹⁵⁾

ここでは、『中国拼音文字運動史簡編』（1948年）が取り上げられているが、『1941年表』の1921年の項にも「瞿秋白はソ連でこのような広範な文盲撲滅運動の影響をうけて中国文字のラテン化の問題を研究し始め、最も早い時期の初稿を書きあげた」との記述がある。上記の指摘は、倪の編年史の著作にも当てはまるものであった⁽¹⁶⁾。

『1941年表』にあった瞿の早期の研究にかんする記述は、後に刊行された『編年紀事』では削除されている。シュプリンツィンの指摘は正鵠を射ていたことがわかる。また、この論考の内容、およびシュプリンツィンが別稿で発表したソ連における新文字運動の記録

(1959年)は、ほとんど書き写すようにして『編年紀事』に挿入されている⁽¹⁷⁾。ソ連における運動の当事者であったシュプリンツィンの見解は、倪においてひとまず積極的に受容されたといえる⁽¹⁸⁾。

しかし、『1941年表』ではシュプリンツィンの指摘する箇所にとどまらず、瞿の役割を重視する記述が多く、箇所で論拠を提示することなく展開されていた。1931年の項は特に顕著で、まず、「瞿秋白がソ連から帰国し、上海で友人の応修人と彭姓の女性とともに、中国文字のラテン化の問題を研究し続けた。彼は研究の成果を、中国の言葉と文字の改革にかんする大変価値のある数篇の論考にまとめた」とする。そして、残りの紙面は、ほとんどそれらの論考の紹介・引用で埋め尽くされているのである。実際には、倪の言及する文章はいずれも瞿の存命時には公刊されず、1935年に処刑された後、『乱弾及其他』(1938年)としてようやく刊行された。未公刊だった一連の原稿が、新文字運動の展開に直接的な影響を及ぼした事実は確認されない。また、同時代に刊行された他の運動家たちの文章においても、瞿秋白の役割への評価は高くない。それどころか、中国で初期の新文字運動を牽引したエスペランティストたちは、新文字の創案における瞿の個人的貢献を評価することを批判していた⁽¹⁹⁾。瞿が創案者の一人であったのは確かだが、その役割と影響を強調したところに、『1941年表』の特徴があった。

そして、シュプリンツィンの指摘をうけて若干の修正が加えられたものの、『編年紀事』でも瞿秋白の貢献を強調する論調は堅持された。再び1931年の項をみると、シュプリンツィンの文章を参照して、ソ連におけるラテン化新文字の創案と普及の過程について加筆されている。が、それ以外はやはり帰国後の瞿秋白が執筆した草稿の紹介である。また、シュプリンツィンの論考は、瞿の先駆性をなお肯定するものであったが、1930年から31年にかけてのソ連の中国学者・言語学者による方案の研究・修正の過程をたどっている。その結果、瞿がラテン化新文字の創案に対して果たした役割を、実質的に限定する記述になっていた。しかし、倪は瞿の貢献の大きさを削がないように取捨選択のうえ引用している。たとえば、「瞿秋白の方案ではただ字母の表を記載し、部分的に音節の表記法を説明するにとどまった」というシュプリンツィンの一文は、明らかに意図的に引用が避けられている⁽²⁰⁾。『1941年表』の特徴であった瞿秋白の顕彰は、『編年紀事』でも繰り返されたのであった。

十分な根拠がなかったにもかかわらず、倪はなぜ瞿秋白の役割と影響を評価するようになったか。そして、およそ半世紀後に刊行された『編年紀事』においても、なぜ瞿秋白の貢献を強調しつづけたか。

この点を考えるうえで、手がかりとなるのが、新文字運動が同時代において受けていた

批判である。特に、先行する国語ローマ字を支持していた国民党系の知識人たちは、当初から新文字運動を批判する論陣を張った。まず批判されたのは、ラテン化新文字がソ連に由来したことである。たとえば、言語学者・黎錦熙は『国語運動史綱』（1934年）において、ソ連の中国学者が創案した新文字は文化的侵略の道具であり、国語のローマ字はやはり中国人が自ら作ったものが望ましい、と主張した⁽²¹⁾。ソ連における創案にかんして、倪が瞿秋白の貢献を強調したことには、由来・国籍を問うこうした批判に反論する意図があったのは間違いない⁽²²⁾。もっとも、ソ連で創案にかかわった中国共産党員には、瞿秋白のほかにも呉玉章、林伯渠、蕭三らがいる。この批判への反論というだけでは、瞿が顕彰された理由の一端を説明するにとどまる。

新文字運動が直面した、より重要な批判は、それがローマ字による諸方言の書記を目指すゆえに、民族の言語の統一にとって障害になる、あるいは国語を分裂させてしまう、というものであった。ソ連における北方話ラテン化新文字の創案時から、創案者たちは標準語を制定して普及させることを強く批判しており、諸方言のローマ字化を志向していた⁽²³⁾。そして、新文字運動が拡大するきっかけとなった大衆語論戦では方言の書記が重要な論点となり、運動が進展するなかで、大衆の読み書きを目的とした諸方言のローマ字表記は精力的に創案された。倪海曙が数えるだけでも、1934年から37年にかけて14の方言についてラテン化新文字の方案が作られたという⁽²⁴⁾。同一の方言について複数の方案が作られることもあり、それらも含めれば、数はさらに増える。こうした動向に対して、黎錦熙は、「私たちは彼らのあの『ラテン化した中国文字』が絶対に実用に耐えないものと認定する。その理由は簡単である。民族が文字を改革するにあたって、民族全体の統一的な標準語が必要だからである」と批判している⁽²⁵⁾。標準語（国語）の普及を重視し、また国語ローマ字を支持する国民党系の知識人たちは、諸方言のローマ字化の積極的な追求に対して否定的であった。

このような批判は1936年後半頃から国内のナショナリズムの高潮とともに拡大した。運動内部でも諸方言のラテン化新文字案の「粗製濫造」を反省する議論が広がり、より積極的に中国（漢民族）の言語の統一を目指すことが主張された。それは、国語ローマ字を支持してきた国民党系の知識人との和解を志向するものでもあった⁽²⁶⁾。

批判の広がりを受けて、新文字運動では民族の統一的な言語の形成を積極的に目指す動きが拡大する。特定の地域の言語を標準語に制定することには反対し続けたが、北方話ラテン化新文字を「区際語」（一種の共通語）として位置づけた。これと諸方言のラテン化新文字の併用を方針としたのであった。また、たしかに百家争鳴の観のあった各新文字案の統合・整理も図られた⁽²⁷⁾。倪もかかわった1938年の上海の難民収容所には計120クラスの

新文字班があり、6割で江南話ラテン化新文字、4割で北方話ラテン化新文字が教えられたという⁽²⁸⁾。区際語＝北方話ラテン化新文字の読み書きに一定の比重が置かれるようになっていたことがわかる。運動の中核であった上海新文字研究会が39年に採択した綱領草案は、こうした方針転換を明確にしている⁽²⁹⁾。原案を執筆したのは倪であり、陳望道が校閲・修正をおこなっていることから、両者は区際語併用論への転換を主導する立場にあったとみてよい。

『1941年表』における瞿秋白の役割の強調は、新たな方針となった区際語（北方話ラテン化新文字）併用論を補強する位置にある。この点を理解するうえで、1930年代前半に瞿が展開していた「普通話」にかんする議論をさらに踏まえねばならない。瞿が主張した「普通話」とは、今日の中国政府が国民全体に普及させようとしている、北京語を基礎としたそのことではない。瞿は、様々な言葉を話す諸地方の人が大都市に集まり、労働者として工場で交わるなかで一種の共通語が形成されつつあるとする。文芸大衆化論争において、瞿はそれを「普通話」と称した。そして、各地方の「原始的」で「偏った」方言が消えていく一方で、「普通話」が発展することで、将来的には全国大の共通語が形成されると考えた。文字については、漢字を廃止してローマ字による「普通話」の書記の推進を主張するとともに、ひとまず方言についても表記法を創ることを提案した⁽³⁰⁾。共通語としての「普通話」の形成と、方言の書記の両立という瞿の主張が、区際語併用論と多分に重なることは明らかである。また、瞿の議論は、共通語の形成を積極的に主張したという点では、民族の言語を分裂させるという批判をかわす際に利用しやすい。区際語併用論者の新文字運動家にとっては、非常に都合のよい言説であった。

倪は、運動の新たな方針となっていた区際語併用論の先駆を、瞿の「普通話」論に見出した。そして、『1941年表』では運動の起源として瞿とその「普通話」論を強調することで、運動が民族の言語の一体性を脅かさぬものであるとアピールした考えられる⁽³¹⁾。『1941年表』の1931年の欄において、瞿の草稿が詳しく紹介されていることはすでに触れた。そのなかで、最も多くの紙面を割かれたのは「普通話」にかんする論説「羅馬字的中国文還是肉麻字中国文」であった。

さらに、1940年代の停滞をへて運動を再開するにあたって、同様の批判に直面したことから、倪は引き続き瞿秋白の議論と役割を強調し続けた。1949年9月に上海新文字工作者協会が成立し、倪は副主席に選ばれた。その際に発表した文章では、かつて瞿の「天才的な提案」があったことが見逃されてきたと記している。提案とは、「自然に発展してきた普通話に応じて、ひとつの新たな中国文を作る——ローマ字の表音文字をもとにして、全国に広く用いられる文字にする」ことであった。倪によれば、民族の言語・文字の統一を

強く打ち出したこの部分が、「普通話」論のなかでも決定的に重要である。この先駆的な主張が十分に理解されなかった結果、運動が「中国の言葉と文字を分裂させる」という誤解が繰り返し生じている。今後の運動ではこの点を明確にし、刊行物にも積極的に記載することで、根拠のない批判を減らすことができる、と倪は主張する⁽³²⁾。批判を回避しながら運動を推進するために、瞿秋白の貢献は戦略的に強調されつづけたのであった。

そして、『編年紀事』の刊行は新文字運動の停止から約30年の時を経ていたが、政府の普通話—もちろん瞿秋白の言う意味ではない—普及政策のもとで、瞿秋白の役割を強調することには、あらためて十分な意義があった。この時には、中国語諸方言のローマ字化を追求した過去をそのまま記述することが政治的に困難になっていた。言論統制下であって、瞿の「普通話」論は、過去の新文字運動を中共政権の言語政策に親和的なものとして示すための、優れた材料となったのである。

この点については、倪が1964年に著した論考「推广普通話的歴史發展」からもうかがうことができる⁽³³⁾。倪は、清末以来の言語改革の歴史について、言語を統一する実践が重ねられ、人民共和国期の普通話政策に到達する過程として描く。そのなかで、瞿の「普通話」論は、のちの中共政権の普通話政策の先駆として、高く評価されている(232-234頁)。一方、新文字運動については、『1941年表』で瞿の「普通話」論と密接に結びつけていたのに、また区際語としての北方話ラテン化新文字の試みもあったのに、記述が避けられている。普通話政策という大前提のもとで過去を振り返るにあたって、瞿の「普通話」論が政治的に安全であることは明らかであった。それは、政策への抵触が危惧される過去を語る際に、一種の護身符になりうるということである⁽³⁴⁾。

かくして、運動における瞿の先駆的役割を強調する記述は、およそ半世紀をこえて引き継がれたのであった。

Ⅲ 諸方言のローマ字化にかんする記述

倪の編年史叙述の偏りとしてさらに指摘されるべきは、諸方言のローマ字化にかんする記述の後景化、ひいては削除である。これは、瞿秋白の貢献を強調するのと表裏一体で生じた。そうした操作は、『1941年表』においてすでにみられるが、『編年紀事』ではより顕著に現れる。

まず『1941年表』について検討しておく、初期の新文字運動において諸方言のローマ字化が積極的に目指されたことについては、一通りの記述がなされている。その担い手となったのは、主にエスペランティストたちであったが、彼らの論説からの長文の引用もな

されている(64-66頁)。また、瞿秋白は共通語としての普通話の形成を展望すると同時に、方言の書記を肯定する主張も繰り返していたが、この点を示唆する文章も引用されている(55、60頁)。

ただし、倪が区際語(北方話ラテン化新文字)併用への方針転換を支持する立場にあったことで、この転換に反対する動向については十分に記述されていない。この点をよくうかがえるのが、胡愈之の論説「新文字運動的危機」(1936年8月)にかんする記述である。同論説は、諸方言のローマ字表記の「粗製濫造」を批判し、また標準語の形成をより積極的に目指すこと、国民政府によって推進された国語運動の成果も参照することなどが提起された⁽³⁵⁾。新文字運動内部で大きな反響をよび、区際語併用への方針転換の端緒となったことで知られる。『1941年表』はこの論説が「当時の新文字運動に対して五つの重要な意見を提起した」とし、結論部をそのまま引用している(92-93頁)。実際には、この論説はすぐに支持を集めたわけではなく、多くの批判が生じた。たとえば、広州の『新文字週刊』では、まもなく胡への批判を目的とした特集が組まれたという。また、エスペランティストで広州の運動を牽引した陳原も、「私たちはその頃は広州話ラテン化新文字の方案に熱中しており、胡愈之の考えは言語の規則に反していて、政治的に右傾であると考えていた」と回顧している⁽³⁶⁾。しかし、『1941年表』はこうした批判の広がりについて、ほとんど言及していない。胡の論説は運動の着実な進展を意図するものであり、「ラテン化論者が受け入れるに値する」(93頁)と、異論を封じるように結論づけているのである。

また、胡らの主張に同意して区際語の設定を容認しつつ、なお慎重な立場をとる運動家も存在した。たとえば、草創期から運動にかかわっていた漢口のエスペランティスト・方善境は、北方話ラテン化新文字を区際語に設定するとしても、それを大衆が真っ先に学ぶものとしてはならない、と主張した⁽³⁷⁾。理由として、大衆にとってまず重要なのは読み書きを習得することであり、それには方言のラテン化新文字の学習こそが近道であるからだとする。しかし、こうした慎重な意見の存在についても『1941年表』では掲載されておらず、運動が区際語併用論へと単線的に転回したかのように記述されている。

つづいて『編年紀事』についてみると、前述のとおり、刊行時には北方話ラテン化新文字以外の諸方言のローマ字化を追求した過去を記述することが難しくなっていた。とはいえ、それが新文字運動の重要な課題であったことも紛れもない事実であった。区際語併用論に方針転換したのち、北方話ラテン化新文字に重点を置くようになったとはいえ、諸方言のローマ字化は運動の核心でありつづけた。したがって、これを全く記述せず、また関連する資料を全く掲載することなく編年史を叙述するのは、ほぼ不可能である。その結果、『編年紀事』の叙述には多くの操作が含まれ、また各資料からの引用に際しては都合の悪い

部分を削除するかたちで編纂されている。

一例として、やや長文になるが、葉籟士の論説「大衆語・土話・拉丁化」（『中華日報』副刊「動向」1934年7月10日に掲載）の引用の仕方を見てもよく、次節であらためて論じるが、葉は当時の上海を代表する左派エスペ란ティストの一人である。同論説は大衆語論戦のさなかに発表され、大衆の読み書きのために漢字を廃棄し、諸方言のローマ字化を主張したものとして知られる。以下は、記事原文からの抜粋で、下線部は『編年紀事』が引用した部分である。

…ラテン化委員会の意見によれば、中国は全国で5～7の方言区に分けられる。各区の方言をすべてラテン化することで、各地の文盲を消滅させる。したがって「ラテン化」は私たちにとって研究・参照する価値がとて大きい。私たちが注目すべきは、それが学者の机上のアイデアではなくて、ハバロフスク・ウラジオストク一帯の華僑のなかで、すでに大衆の文盲を消滅させる運動として非常に広範に展開されていることである。

私が前に述べた「方言文字」は、多くの反対と非難に必ず遭うだろう。表音の方言文字を提起することは中国の分裂につながりかねない、「各地の住民の文化の連絡をバラバラにする」、だから全国を統一できる文言文や白話文には及ばない、と言う人は必ずいるだろう。私の回答はというと、漢字（文言文にせよ白話文にせよ）がつかないものは、「武器をもつ人」と「羽団扇をもつ人」であって、大衆ではない、というものだ。漢字は徹頭徹尾、大衆とは無関係である！しかも、私が上に述べたように、全国で統一的な大衆語と「方言文字」は並行して矛盾しない。ただ「方言文字」を提唱することでのみ、大衆語の成長を促進できるのである。特定の地域のことば（それが北京語であれ南京語であれ）をもって標準とし、全国を統一しようとするのは、結局徒勞に終わる。注音符号と国語ローマ字の失敗は、すでにそのことを私たちに教えた。

国語ローマ字については、私は以前少しみたことがあるが、今にいたるまで身につけられていない。ラテン化にかんする本は、三種類を見たことがある。そのうちの二冊は字典、一冊は概ね書き方（表記法と検字）にかんするものであった。いずれもソ連のエスペラント語の同志が送ってきたもので、それも適当に目を通しただけである。

葉は、漢字が特権階級に独占されていて大衆を読み書きから遠ざけているとし、また、標準語の普及政策をも批判することで、実質的に国民政府の政策を否定している。そして、漢字の廃棄と諸方言のローマ字化による大衆の読み書きの実現、という新文字運動の主張

を表明している。しかし、『編年紀事』ではその肝心な部分を避けながら、記事の引用がおこなわれている。引用部分（下線部）を通じて、かわりに浮かび上がるのは、文字を読めない大衆のための優れた識字運動という事実すぎない。倪は人民共和国期における北京語を前提とした識字教育の前史として、過去の新文字運動を矮小化したのであった。

30年代後半に登場した区際語併用論にかんする文献の引用についても、同様の削除・変更がみられる。1939年に上海新文字研究会が採択した「拉丁化中国字運動新綱領草案」にかんする記述を見てみよう。同草案は、北方話ラテン化新文字を区際語として特権的な位置に据えるものではあった。だが、そこにはなお、多くの留保が付されており、諸方言の書記の意義を強調する文言があった。たとえば、第4項では、北京語のような特定の地域の言語をもって全国を統一するようやり方には反対する、という一文がみえる。また、北方話ラテン化新文字を区際語に設定しつつも、それが「過渡的な時期において未来の民族統一語の一部の任務を担う」とし、役割を限定していたのである⁽³⁸⁾。しかし、『編年紀事』は、第4項が「北方話を民族統一語の基礎とすると指摘した」（148頁）とのみ記述する。異なる意見の存在を示唆する文言については、言及を避けているのである。北方話ラテン化新文字を中心とした諸方言の統一が、運動家たちの一致した目標であったかのよう叙述している。

以上の検討から明らかなように、倪海曙は運動方針の転換や、人民共和国成立後の言語政策に対応しながら編年史を叙述していた。それが端的に表れているのが、瞿秋白の役割の強調、そして諸方言の書記にかんする活動の削除である。瞿を先駆者として顕彰する記述のもとで覆い隠されたのは、初期の運動を牽引したエスペランティストたちの活動であった。諸方言のラテン化新文字を積極的に創案したのも、彼らであった。以下では、その活動のもとで新文字運動がいかに始動したか明らかにする。

IV 左派エスペラント運動の形成

エスペランティストたちがソ連で創案されたラテン化新文字を中国に紹介し、初期の運動を牽引したことは、先行研究においても指摘されてきた。しかし、なぜほかならぬエスペランティストだったか。エスペラント運動史の文脈を切り口として彼らの活動を跡づけることで、この問いの答えは浮かび上がるだろう。

エスペラント語は、1887年にポーランドの医師ルドヴィコ・ザメンホフによって発表された人工言語である。まもなく、ヨーロッパを中心としつつも世界各地で学習者が現れ、歴史上、最も普及した国際補助語となった。エスペラント語の特徴は、母語話者の不在を

背景とした中立性と、整理された文法規則と語構成による習得の容易さにある。学習者たちはしばしば、単に趣味や国際交流の手段として言語を学習したのではなかった。エスペラント語の特徴を手がかりとして、言葉の壁をこえて人間の連帯をめざす多様な社会運動(エスペラント運動)が形成された⁽³⁹⁾。

中国と日本においてエスペラント語が受容されるようになったのは、20世紀初頭のことである。中国では、エスペラント語は「世界語」と訳された。初期の学習者だった大杉栄と中国人留学生の交流や、やはりエスペランティストであったV.エロシェンコと日中の知識人の関係についてはよく知られている⁽⁴⁰⁾。しかし、1920年代後半以後の日本と中国では、ヨーロッパ・ソ連の運動の影響を受けて、新たに左派エスペラント運動が形成されていった⁽⁴¹⁾。新文字運動を牽引したエスペランティストの活動も、インターナショナリズムを背景として展開されたこの左派エスペラント運動の文脈において、はじめて理解できる。

まず、第一次世界大戦後のヨーロッパ・ソ連を中心としたエスペラント運動の展開を概観しておく⁽⁴²⁾。大戦以前から、エスペランティストの国際組織としては世界エスペラント協会(UEA)が存在した。しかし、1921年には、その政治的中立の姿勢を批判して、国民性無き全世界協会(SAT)が組織された。SATは労働者によるエスペラント団体を標榜しており、以後、SATを中心に左派的なエスペラント運動の勢力が拡大していった。SATの指導者となったのは、フランスのエスペランティストで、社会主義活動家でもあったE.ランティ(Eugène Lanti、本名はEugène Adam、生没年:1879-1947)である。彼はエスペラントを階級闘争の手段として位置づけたうえで、国別の組織による加盟を否定し、国籍をもとにしない会員の組織化を目指した。SATの勢力は急速に拡大し、1929年には6,000人を超える会員数を有するにいたっている。これは、UEAの会員数の約3分の2にあたる規模である。SATの拡大の背景には、社会主義国として成立していたソ連の影響を受けつつも、社会主義に連なる多様な立場を緩やかに包摂する組織として運営されたことがあった。

アジアにおいてSATの支持者が増加したのは、日本であった。一方、中国のエスペランティストによるSATへの対応は遅れた(表1)。日本では、政治的中立の立場を守る全国組織・日本エスペラント学会が先に創立されていた。しかし、1925年頃からSATの活動に参与する左派エスペランティストたちの団体が登場する。エスペラント青年同盟、柏木ロンド、クララ会、プロレタリア科学研究所内のエスペラント研究会が、よく知られている。いずれも、SATの機関誌であった*Sennnaciulo*の学習や投稿、そこで得られた知識にもとづくエスペラント語の普及、エスペラント語を利用した社会主義文献の紹介などが主な活動だったようである⁽⁴³⁾。以後、日本の運動は、中国における左派エスペラント運動の発展に大きな影響を与えることになる。

表1 各国における *Sennaciulo* の購読者数（上位十ヶ国と日本・中国）

	1930年6月	1930年12月	1931年3月	1931年6月
ドイツ	1,146	1,027	872	510
ソ連	1,025	374	96	18
フランス	230	234	218	209
オーストリア	207	186	186	130
イギリス	207	183	173	101
スウェーデン	182	173	177	193
オランダ	123	133	161	249
スペイン	116	92	98	44
ハンガリー	88	84	11	12
ポーランド	93	69	62	39
日本	68	67	91	12
中国	2	5	6	2
その他	553	478	458	308
総計	4,040	3,105	2,609	1,827

出所) 以下の資料をもとに作成。

“Tra Esperanto, el la Administrejo”, *Sennaciulo*, No. 342, Aprilo 23, 1931, p. 239; “Raportaro de la plenumkomitato de SAT”, *Sennaciulo*, No. 392, Julio 28, 1932, p. 220.

もともと、1928年頃には SAT の中央における幹部間の亀裂は拡大し始め、分裂へと向かった⁽⁴⁴⁾。その主な原因は、ソ連の会員およびソ連体制の支持者との関係維持の困難によるものであった。彼らは SAT の運営をソ連の政策方針に従属させようとしたが、幹部のランティらはこれに反対しつづけた。当初は両者の緊張関係は隠されたが、ソ連における思想統制が厳しくなるとともに、多様な主張を包摂する組織として SAT を維持することが困難になった。ソ連の統一のエスペラント団体であったソヴェト・エスペランティスト同盟 (SEU) の指導者は、E. ドレーゼン (Ernest Drezen、生没年:1892-1937、ラトヴィア出身) であった。彼はソ連への支持を明確にしない SAT の運営を批判し、1928年にはソ連に居住する SAT 会員が脱退する可能性をほのめかすようになる。そして、30年にはボリシェヴィズムへの支持を表明していたドイツ労働者エスペラント協会とともに、SEU は「幹部反対派」とよばれる分派を組織したのであった。彼らは新たに機関誌 *Internaciisto* をベルリンで創刊する。最終的に幹部反対派は SAT を離脱し、32年8月に SEU を中心とした新たな国際統合組織である、プロレタリア・エスペランティスト・インターナショナル (IPE) を組織している。

日本で SAT にかかわっていた左派エスペランティストたちは幹部反対派を支持し、1931年1月には日本プロレタリア・エスペランティスト同盟 (JPEU) を組織した。この組織は日本共産党の影響下にあり、綱領の第1項として「エスペラントのプロレタリア的宣伝普

表2 *Internaciisto* の購読者数（1931年7月、上位十ヶ国と日本・中国）

	人数
ソ連	1,543
ドイツ	402
フランス	128
日本	122
ポーランド	88
アメリカ	55
イギリス	52
スウェーデン	47
オランダ	21
エストニア	20
ハンガリー	20
中国	1
その他	104
合計	2,603

出所) “? 2671-2462? ! 5000 !”, *Internaciisto*, No. 22-23, Septembro A, 1931, p. 187.

及び実用」をかかげた。また、機関誌として『カマラード』(月刊)を出版した。同盟員は全国で300人以上、機関誌の読者は2,500人いたとされ、国内の左派エスペ란ティストを網羅していたといえる⁽⁴⁵⁾。JPEUの指導者の一人であった大島義夫(生没年:1905-1992、筆名は高木弘)は、ドレーゼンの主著 *Analiza Historio de Esperanto-Movado* を全訳して刊行しており⁽⁴⁶⁾、SEUのJPEUへの影響は極めて顕著であった。*Internaciisto*の購読者数からは、ヨーロッパ以外では日本が幹部反対派の一大拠点になっていたことがわかる(表2)。1932年8月に、SEUが中心となってIPEを組織すると、JPEUもこれに加盟している。

SATの幹部反対派の主な活動としては、いわゆるプロレタリア・エスペラント通信(以下、「プロエス通信」と略す)が挙げられる。これはエスペラント語を利用した通信によって得られた海外の情報を、各国の左派系新聞・雑誌に掲載するなどして拡散していく活動である。特にソ連のエスペ란ティストと海外の左派エスペ란ティストの間の通信が組織された。資本主義国における情報の歪曲が懸念される傍ら、ソ連のエスペ란ティストから情報を受信し、さらに拡散することがそれへの解毒剤になると期待された⁽⁴⁷⁾。プロエス通信の成果として、たとえば *Internaciisto* には、しばしばエスペラント語で日本の労働運動と政府・企業による弾圧が、また『カマラード』にはほぼ毎号、ソ連の社会主義建設の進展が翻訳・紹介されている。もとより、体制から発出される通信にはあらかじめ厳しい検閲があり、伝えられる内容の多くは体制のプロパガンダをなぞったものであった。しかし、またプロエス通信によって多くの情報が国境を越えて往来したことも事実であ

る⁽⁴⁸⁾。次節でみるように、ソ連から中国へのラテン化新文字の伝播も、広義にはプロセス通信の成果の一部といえるのである。

さて、中国の左派エスペラント運動の形成は遅れたものの、1920年代末には漢口のエスペランティストたちにおいてその萌芽を見出すことができる。1929年12月に漢口世界語学会が成立し、30年1月に月刊誌『希望』を創刊した。この組織の中心人物こそ、のちにソ連で創案された北方話ラテン化新文字を中国に紹介し、新文字運動を牽引することになる方善境（生没年：1907-1983、筆名は焦風）であった。方は鎮海の出身で、澄衷中学校商科を卒業後、上海世界語学会の通信教育をきっかけにエスペラント語を学んだ⁽⁴⁹⁾。元来、中国国内では上海にエスペランティストが集中していたが、1930年前後の時期には活動が停滞していたようである。当時、国内で機関誌を定期的に出版していたのは漢口世界語学会のみであった。『希望』は毎号10頁前後ながら、その精力的な活動ぶりをうかがえる⁽⁵⁰⁾。初期の『希望』は、主に中文で記述されたが、エスペラント語で書かれた記事もしばしば掲載された。1930年4月号から SAT への関心を示す記事が散見されるようになり、まもなく SAT を支持するにいたったようである⁽⁵¹⁾。

初期の『希望』の論説からは、彼らがエスペラント語の学習や普及、国際交流だけでなく、より広く中国の言語・文字をめぐるテーマに関心を寄せていたことがわかる。たとえば、創刊号の冒頭を飾る記事では、文字は時代の需要に合わせざるをえないとし、新たな時代と文化を創るには新たな文字が必要であるとする。特に、象形文字である漢字はヨーロッパ言語の表音文字に大きく劣ると批判したうえで、エスペラント語の導入を訴えた⁽⁵²⁾。また、方善境の論説「中国可以怎樣利用 ESPERANTO」は、漢字では精密な科学の文章を書けないと批判する⁽⁵³⁾。そして、漢字の廃止を目指して注音字母あるいは国語ローマ字を普及させるとともに、エスペラント語を第二の国語にすることを主張していた。さらに、「排斥外国語問題和世界語」⁽⁵⁴⁾において方は、先進国の文明を学ぶにあたって、中立的な言語・エスペラントを利用するべきだと訴えている。その理由として、英語の勢力が生活内部に侵入し、自分たちの「国語の生命」を脅かしているという現状認識が示されている。漢口のエスペランティストたちにおけるインターナショナリズムへの関心は、中国ナショナリズムへの共感に根差すものであった。

漢口のエスペランティストについて注目されるもう一つの特徴は、日本の左派エスペラント運動の動向を積極的に参照していたことである。その点がよくうかがえる事実として、清見陸郎の論説“Pri Esperanta Literaturo”（エスペラント文学について）を、方善境が中文に訳して『希望』（第1巻第6期、1930年6月）に掲載したことが挙げられる。清見は劇作家として知られるが、日本国内で最初期に SAT を支持したエスペラント団体・柏木ロン

ドの構成員でもあった。同記事は、エスペラント文学がプロレタリア文学とともに発展することを求める内容で、当初、日本エスペラント学会の機関誌 *La Revuo Orienta* の1930年3月号に掲載された。同号と翌月号はSATの活動を特集する内容であった。日本への強い関心なくしては、これを見逃さず、しかも3カ月後に訳稿を発表することはできないだろう。

方が同時期に、魯迅に対して雑誌『プロレタリア科学』とエスペラント運動の関係について書信で問い合わせていたことも、これを裏付ける⁽⁵⁵⁾。刊行元のプロレタリア科学研究所の内部では、エスペラント研究会が運営されており、同誌には、しばしばエスペラント語による雑誌の要約や、運動の関連記事が掲載された⁽⁵⁶⁾。研究会の活動は、まもなくJPEUの結成につながったから、方は日本の左派エスペラント運動の主な動向を追いかけていたことになる。加えて、漢口世界語学会には、横浜正金銀行漢口支店に勤務していた日本エスペラント学会員・岡村衆一が、幹事として参加していた。彼はエスペラント語の指導の点でしばしば重要な役割を果たしており、特に方は毎週、岡村を訪ねて教わったという⁽⁵⁷⁾。岡村が、漢口世界語学会に日本のローマ字運動にかんする複数の書籍を寄贈している事実も確認される。方は論説で日本のローマ字運動に言及することがあったが、岡村からその動向についても教わっていた可能性が高い⁽⁵⁸⁾。のちに方が新文字運動を牽引したことと考え合わせると、実に興味深い事実である。SATの中心はヨーロッパおよびソ連であったが、漢口のエスペランティストたちにとって、日本の運動は最も身近な参照先であった。

漢口で先行していた左派エスペラント運動の拡大の契機となったのは、満州事変であった。漢口世界語学会はただちに『希望』誌上で日本軍の侵略と被害の状況をエスペラント語で記して報道したほか、中国各地のエスペラント団体を糾合して抗議宣言を発表している⁽⁵⁹⁾。宣言文の印刷部数は9,500部にのぼり、通信関係にあった世界各地のエスペラント組織・関係者に送信され、また宣言を支持する返信がソ連・日本・ブルガリア・ドイツなどから集まった⁽⁶⁰⁾。これと並行して、『希望』1931年11月号ではソ連のSEUによって発表された論説が紹介され、12月号ではSEUの指導者であったドレーゼンの論説の翻訳が掲載されている⁽⁶¹⁾。満州事変をきっかけとして、漢口世界語学会ではSATのなかでも幹部反対派、特にSEUを支持する立場が明確になった。

そして、1931年12月には中国プロレタリア・エスペランティスト同盟（中国普羅世界語者聯盟、ĈPEU）が上海で創立される⁽⁶²⁾。ĈPEUは上海を拠点とする実質的な全国組織として、以後の左派エスペラント運動を牽引していくことになる。漢口と北京の左派エスペランティストたちは、それぞれĈPEUの支部を組織した。綱領の第1項は、「プロレタリアートの立場によるエスペラントの利用と宣伝」で、JPEUとほぼ同じであった。また、

ĈPEUは、やはり創立とともに幹部反対派を支持する姿勢を明確にしている⁽⁶³⁾。小規模ではあったが、中国左翼作家聯盟などとともに中国左翼文化総同盟の一角も構成した。

同盟の書記には、1920年代に『学生雑誌』のエスペラント欄を担当し、国内では最もよく知られたエスペランティストの一人であった胡愈之（生没年：1896-1986）が選ばれた。胡は、1928年に白色テロを警戒してフランスに亡命していたが、中国への帰国の途次、モスクワに滞在してドレーゼンをはじめとするソ連のエスペランティストたちと交流している。見聞の内容を『莫斯科印象記』（1931年8月）として刊行したことで、名を馳せていた⁽⁶⁴⁾。

幹部反対派を主導したのはソ連のSEUであったが、ĈPEUの活動はやはり日本のJPEUの運動の影響を受けて展開された部分が大きかったと考えられる。ĈPEUはエスペラント学習のための通信教育を運営するほか、秘密活動として、国内向けに機関誌『中国普羅世界語者』を刊行した。また国外への発信としては、*Internaciisto*をはじめとする左派エスペラント雑誌に投稿し、特に日中戦争や中国共産党の勢力の動向を報道した⁽⁶⁵⁾。かかる出版・通信の形態は、概ねJPEUにおいてすでに実践されていたものである。その背景として、人的なつながりが重要だったのは間違いない。たとえば、同盟の創立を主導した楼適夷（生没年：1905-2001）は、日本留学中の1930年夏に、プロレタリア科学研究所主催のエスペラント学習会に参加していた。これをきっかけとして、日本の左派エスペランティストたちと往来があったという。また、のちに同盟の運営を主に担った葉籟士（生没年：1911-1994）は、上海世界語学会の通信学校でエスペラント語を学んでから、1928年に日本に留学し、東京高等師範学校に学んだ人物である。葉も、やはり同じ学習会に参加していた⁽⁶⁶⁾。こうした人脈と通信関係のもとで、JPEUを手本にするかたちでĈPEUは活動を展開したのであった。

以上の経緯について、倪海曙の編年史は沈黙している。1930年前後の時期にかんする叙述は、ソ連におけるラテン化新文字の創案と普及、そして瞿秋白の草稿の紹介で占められていた。しかし、この左派エスペラント運動の形成こそが、ラテン化新文字にかんする情報と資料の受容、そして新文字運動の始動を導くのである。

V ウクライナから中国への情報の到達

漢口のエスペランティストは、ĈPEUの成立とともにその漢口支部を構成するようになったが、特にソ連のエスペラント運動の理論の受容につとめた。主な情報源となったのは、1932年4月にモスクワで創刊されたエスペラント語雑誌 *La Nova Etapo* であった。ソ連

の国際革命エスペラント作家同盟と労働者エスペラント協会言語委員会国際書記局が共同で刊行した機関誌で、内容はエスペラント文学から言語理論まで多岐にわたった⁽⁶⁷⁾。中国の左派エスペラント運動においてSEUへの支持はすでに固まっていたが、SEUの活動や前提となる理論的知識の詳細が把握されていたわけではない。漢口では、そのキャッチアップが図られた。

La Nova Etapo からは二本の論文が中文に翻訳されたが、最初に訳されたのは創刊号のE. F. スピリドヴィッチ著“Genia Lingvisto Venkita de Etburgeco: Fundamentaj Momentoj en la Lingva Teorio de Zamenhof”（プチブル精神に敗れた天才の言語学者——ザメンホフの言語理論における基礎の契機）である。これは、方とともに漢口世界語学会で中心的役割を果たしていた傅平によってただちに訳され、「柴門霍夫の語言理論及其思想之批判」という題で『希望』（第3巻第7期・第8期、1932年7、8月）に掲載された。スピリドヴィッチ（Efim Feofanovič Spiridovič、生没年：1891–1958）はベラルーシ出身のエスペランティストで、SEUの中央委員会のメンバーであった。ロシア–エスペラント語辞典を編纂したことでも知られる。当時、ウクライナの首都ハルキウにある言語科学研究所の指導員だったとされる⁽⁶⁸⁾。なお、同時期にJPEUの大島義夫と井上英一も、スピリドヴィッチがロシア語で刊行していた別の論説『言語学と国際語』を翻訳するとともに、この論文の翻訳も付して出版している⁽⁶⁹⁾。

スピリドヴィッチは、ソ連の言語学の権威であったニコライ・マルの学説を拡張しつつ、上部構造にあたる言語が分散状態から統一状態に向かって発展すると考えた⁽⁷⁰⁾。特に、資本主義時代には各国で民族語が優位だが、過渡期には民族語とエスペラント語（国際補助語）が並用されるようになり、共産主義時代には諸民族語とエスペラント語が融合した普遍語が用いられるという、段階論を提示した⁽⁷¹⁾。SEUの指導者のドレーゼンも著書において類似する考えを記していたが、スピリドヴィッチはより体系的に理論を提示したといえる⁽⁷²⁾。『希望』誌上で訳された論考もこの理論を敷衍したものであった。この理論について、エスペラント語の役割を過大に評価しており、極左的だとするモスクワの非エスペランティストからの批判もあった。しかし、SEUの構成員のあいだでは、相当に広い支持を得ていたようである⁽⁷³⁾。のちに、方善境や葉籟士は新文字運動を推進するにあたって、この理論を積極的に参照した。言語が本質的に統一に向かう趨勢にあるからには、諸方言のローマ字化を推し進めても民族の言語の統一を脅かすことはない、と主張するのである。

翻訳されたもうひとつの論説は、*La Nova Etapo* 第2号（1932年6月）掲載の、蕭三著、V. コルチンスキー訳“La Alfabeto de l' Ĉina Revolucio: Latinigo de Ĉina Skribo”（中国革命のアルファベット——中国文字のラテン化）である。蕭三の原文はロシア語であろう。この

論説は、方善境によってエスペラント語から中文に重訳された。中国国内へのラテン化新文字の伝播の契機になったとして、倪海曙の著作や先行研究で必ず言及される出来事である。蕭三は古参の中国共産党員で、長くソ連に滞在したことで知られる。ソ連における中国語のローマ字化の創案と普及にも従事した⁽⁷⁴⁾。同論説は、ソ連で北方話ラテン化新文字が中国人労働者に対して普及されることを報じたほか、その表記システムの内容についても言及があった。加えて、1930年にハルキウで開催された国際革命作家同盟の会議が、中国左翼作家聯盟にラテン（ローマ字）化の推進を求める決議をおこなったことも伝えている⁽⁷⁵⁾。1932年なかばには、ソ連における中国語のローマ字化の試みについて、中国・日本においても断片的には報じられるようになっていた。しかし、国際革命作家同盟における決議を含む、運動にかんする比較的詳しい情報は、この蕭三論説の受容によってようやく伝わったのであった⁽⁷⁶⁾。

ここで注目すべきは、ロシア語からエスペラント語、そしてエスペラント語から中文へ、重訳という遠回りをへて、中国に伝わった理由である。より端的に言えば、ロシア語で書かれたはずの蕭三の論説が、わざわざエスペラント語に訳されて *La Nova Etapo* に掲載されたのは何故か⁽⁷⁷⁾。

この点については、蕭三のロシア語原文のエスペラント語訳を担当した V. コルチンスキー（Viktoro Kolčinski、生没年：1904-1937）の活動と、その訳文に特に付された脚注を検討することで明らかになる。彼はハルキウを拠点として活動したエスペランティストで、全ウクライナ・エスペラント委員会書記を務め、SEUの中央委員会のメンバーでもあった。エスペラント運動史においては、S. トレチャコフ『吼えろシナ』のエスペラント語訳、『ロシア-エスペラント語大辞典』（1933）の編纂などでもよく知られた人物である⁽⁷⁸⁾。今日ではほとんど忘れ去られているが、1930年代後半にスターリン体制による弾圧—コルチンスキーはそのなかで命を落とすことになる—が拡大する以前は、ウクライナはエスペラント運動の一大拠点であった。1932年時点のSEUの構成員について、ロシア人（50.2%）の次に多いのが、ウクライナ人（22.1%）であった。なかでも首都ハルキウは運動の中心地であり、コルチンスキーは、そこでウクライナのエスペラント運動を指導する立場にあった⁽⁷⁹⁾。

コルチンスキーがSEUのなかで、海外における左派エスペラント運動の扶植を主導していたことは、蕭三論説の翻訳を考えるうえでひとつの手がかりとなる。彼はそれぞれの言語によって「赤いエスペラント語教科書」を作ることで、労働者の学習者を増やせると考えており、その作成を指示していた⁽⁸⁰⁾。運動の扶植の主な対象地域はアジアであり、とりわけ中国であった。1931年には、日本で刊行された『プロレタリア・エスペラント講座』

(鉄塔書院)が成功したのをうけて、中国、インド、インドシナ、インドネシア、アラブ諸国における左派エスペラント運動を支援する「東洋基金」も創立している⁽⁸¹⁾。また、ウクライナは前述のプロエス通信の拠点でもあった。当時の日本・中国のエスペランティストや左派エスペラント団体には、プロパガンダの入り混じった連絡・記事が多数届いている⁽⁸²⁾。彼はウクライナでそうしたプロエス通信の組織化にもかかわったとみられる⁽⁸³⁾。

そのような彼の役割に鑑みれば、ソ連領内のローマ字化の成功と内容をさっそくエスペラント語で発信することには、ソ連の文化政策と左派エスペラント運動の力を海外に知らしめる意図があったのは間違いない。また、プロエス通信の文脈からいえば、体制の対外プロパガンダを構成する一面があったといえる⁽⁸⁴⁾。

しかし、コルチンスキーのエスペラント語訳文には、蕭三のロシア語原文にはなかったはずの、そしてのちに中文にも訳されなかった、ひとつの脚注が付されている。これを手がかりとすることで、プロパガンダにとどまらぬ全く別の意図も存在したことが見えてくる。蕭三は論説のなかばで、中国語諸方言にある多岐にわたる声調（たとえば北京語の四声）を表記しないことを理由とした、ラテン化新文字への批判があることに言及する。そして、声調はアクセントにすぎず表記しなくても問題ないと主張することで、批判に応答した。エスペラント語訳文に独自の脚注はこの箇所につされており、以下のように記されている。

中国の同志たちの声調にかんする議論は、私たちエスペランティストにとって重要な意義がある。なぜなら、エスペラント語に対して、まさしく同じ議論（中国の言語には特殊な声調がある）がマルキシストの同志たちから繰り返し突きつけられているからである（たとえば、スクリプニク同志の論考「社会主義時代における諸民族の接近と融合」によって）。彼らは、エスペラント語が東洋の諸言語の構造とはあまりにかけ離れているかのように述べている。⁽⁸⁵⁾

「スクリプニク同志」とは、ウクライナの教育人民委員で、同時期にウクライナ化政策を推進していた、かのニコラ・スクリプニクのことである。民族共産主義者とも評されるスクリプニクは、ウクライナ語の正書法の改革（1928年）に関与した一方で、エスペラント語にかんして批判的な文章を発表していたことで知られる⁽⁸⁶⁾。また、「東洋の諸言語」は、ここでは中国語や日本語だけでなく、ウクライナ語を含むものと理解すべきだろう。

コルチンスキーは、キリル文字を使用したウクライナ語の書記について、エスペラント語のローマ字表記システムをもとに再構成しようとしていたとみられる。つまり、ウクラ

イナ語のエスペラント式ローマ字化である⁽⁸⁷⁾。エスペラント語の表記システムは、28のローマ字を使用して一文字一音の原則で記すという、簡略化されたものである。これに対してスクリプニクからは、ウクライナ語をはじめとする諸言語がエスペラント語とは構造的に大きく異なり、特にエスペラント語の表記システムをもとにしてはそれらの特殊な音声に対応できない、という批判が提起されていた。そうしたなかで、コルチンスキーは、中国語の書記にかんする蕭三の主張において、スクリプニクらへの反論の糸口を見出した。蕭三の論説は、多様な声調を表記せずとも問題ないとし、複雑な音声体系を持つ言語のローマ字化を実質的に楽観視する内容である。コルチンスキーは、ウクライナ語のローマ字化の実現可能性を示唆するものとして、蕭三論説を理解した。そして、論説をエスペラント語に翻訳することで、ウクライナおよびソ連の他のエスペランティストにこれを伝えようとしたのであった。

加えていえば、コルチンスキーはウクライナ語のみならず、エスペラント語の書記についても改革を模索していた。彼は、同時期に発表したトレチャコフ著『吼える支那』のエスペラント語訳において、実際に実験を試みていた。元来のエスペラント語にはない独自の文法表現や新語を文中に挿入していたのである。それにより、*Internaciisto* の書評欄では痛烈に批判されているから、左派エスペランティストのあいだでも賛否が分かれる試みだったのだろう⁽⁸⁸⁾。しかし、ウクライナ文学にかんする別の訳者のエスペラント語訳についても、やはり独自の略語の挿入が試みられていたことが確認される。これについては、SEUの言語委員会の専門部会が「全会一致で、いわゆる『エスペラント語のハルキウ・ジャーゴン』を非難」している⁽⁸⁹⁾。コルチンスキーの試みは孤立したものではなく、少なくともハルキウを拠点としたエスペランティストの間には相応する文脈があったことがわかる。ソ連のエスペランティストによる書記をめぐる実験と論争に連なるものとして、蕭三論説の翻訳は理解できるのである。

スターリン体制下のエスペラント運動史を検討したU. リンスは、ロシア人以外のエスペランティストたちが、ロシア語の支配に対抗する手段としての役割をエスペラント語に期待していたと指摘する⁽⁹⁰⁾。もとより、1932年のウクライナはウクライナ化政策の最末期にあたり—これを推進していたスクリプニクは翌年には自殺に追い込まれる—、その際のコルチンスキーの翻訳の意図を厳密に考察するのは容易ではない。しかし、彼がキリル文字を使用するウクライナ語の書記について、ローマ字化を企図していたことは、やはり重要である。また、『ロシア-エスペラント語大辞典』を編纂したのち、エスペラント-ウクライナ語辞典の作成にも従事しようとしていたという⁽⁹¹⁾。ロシア語のみならずエスペラント語を媒介とした、諸民族の水平的な連帯を企図していたとみることは許されるだろ

う⁽⁹²⁾。スターリンはもちろん、スクリプニクとも異なった形のインターナショナリズムが志向されるなかで、蕭三論説の翻訳はおこなわれたのであった。

かくして、1932年6月には *La Nova Etapo* 第2号にコルチンスキーの訳稿が掲載され、方善境はまもなく重訳して中文訳稿を作成した。倪海曙の『編年紀事』(84頁)は、方の訳業が、同時期に『文学月報』誌上で生じた文芸の大衆化をめぐる論争、特に瞿秋白のローマ字化にかんする主張から刺激を受けたものだとする。しかし実際には、方は同年8月に発表した記事で、瞿がいまだに漢字にこだわり、表音文字の採用を主張しないことを批判していた⁽⁹³⁾。また、同記事では、ソ連領内のラテン文字化運動に言及し、「ソ連にはたくさんさんの小さな民族があり、彼らは以前は話し言葉のみで文字がなかった。しかし、現在ではいずれもローマ字を持つようになった」と紹介する。そして、詳細はまだわからない部分があるものの、ソ連で中国の言語のローマ字表記システムも新たに創案されたことに注意を促す。これを参照して、大衆が読み書きできるような新たなローマ字表記を漢字の代わりに普及させるべきである、と方は主張していた。明らかに、蕭三の論説の影響を強く受けた記述である⁽⁹⁴⁾。ここでも瞿の影響を強調する『編年紀事』の記述は根拠を欠いている。先行する漢口の左派エスペラント運動の文脈において、方の翻訳は理解されねばならない。

もっとも、方の訳稿が公刊され、新文字運動の始動につながる反響を得るまでには、さらに一年の時を経なくてはならなかった。方は訳稿を完成させてまもなく、瞿の論説が掲載されていた『文学月報』に投稿したが採用されなかった。原稿は、ĈPEUの葉籟士のもとにしばらく保管されたという⁽⁹⁵⁾。

VI 連鎖する書記言語の試み

1932年末に、左派エスペラント運動の機関誌となる『La Mondo 世界』(以下、『世界』)が創刊され、まもなくしてこれを運営する上海世界語者協会も成立した。同会は、秘密活動が中心であったĈPEUが、公開活動のために別に組織した団体である。『世界』(月刊)の編集はその主な業務となり、葉籟士が編集作業を担った⁽⁹⁶⁾。漢口世界語学会の『希望』は1932年10月号をもって停刊となっていた。『世界』はこれを引き継ぐかたちで、左派エスペラント運動の主要なメディアになったのであった。

記事の主な内容は、学習方法、上海を中心としたエスペラント関係者の活動、海外のエスペラント団体の動向などである。政治情勢を直接あつかう記事は限られているが、SEU、そしてソ連の体制を支持する姿勢は顕著であった。そして、これに連なる日本の左派エス

ペラント運動についても好意的な紹介がなされている⁽⁹⁷⁾。漢口世界語学会の会員だった人物も『世界』にしばしば投稿しており、特に方善境は葉籟士とともに主な寄稿者の一人であった。

一般読者向けのわかりやすい記事が中心であったが、葉・方らの記事において、エスペラント語に関連する言語理論への強い関心をうかがうことができる。1933年3月には葉と方で言語科学研究会を組織するとの記事がみえる。この頃には、上海世界語者協会の関係者のあいだで、SEUの指導者・ドレーゼンの著作の翻訳が主に進められた。すでに日本語で大島義夫らによって翻訳が刊行されていた *Analiza Historio de Esperanto-Movado* (分析的エスペラント運動史)、*Zamenhof* (ザメンホフ)のほか、*Historio de la Mondolingvo* (世界語の歴史)の翻訳もすすめられた⁽⁹⁸⁾。『希望』に見られた理論的関心を継承し、ソ連のエスペラント運動の受容が目指されたといえる。なお、*Historio de la Mondolingvo*には、すべての文章語について「正書法の簡素化」と「ローマ字の国際的基礎にもとづいた文字の統一」が実現されるべきという記述がある。のちの新文字運動につながる議論として、重要であろう。また、「絶えずより豊富になりながら、さらにまた発展した民族語からすべての価値ある要素を吸収しながら、エスペラント語は次第に、絶えずより高い程度で、人類の国際語となる」という主張も注目し得る⁽⁹⁹⁾。スピリドヴィッチの議論と同様に、のちの新文字運動における諸方言のローマ字化の追求を下支えする、言語の段階論・混合論が提示されていた。

また、『世界』の「展望台」欄は日本の『国際語研究』(大島義夫編、フロント社、1933年1月創刊)に頻繁に言及しているが、特筆すべきは、同誌が日本語のローマ字化を喫緊の課題として位置づけていたことである。大島が創刊号に寄せた論説「言語問題の階級的意義」には、以下のようにある(20頁)。

以上述べた民族語、国際語における階級的的研究、実せん者の任務を要約すれば、民族語の分野においてわ、われわれの民族言語——日本語の「エスペラント・ローマ字化」、それにともなう階級的身分的要素の排除及び「ローマ字化の前提としての漢字、カナの整理」がその階級的目標であり、国際語の分野にあってわ、国際語エスペラントの積極的階級的実用——ほん語、通信、原作等とその実用的活動の「大衆的組織的統制」とすることができる。もちろん繰返して言

(注：謄写版の原本上に大島の意図がよく表れているので、抜粋して掲載する。)

大島によれば、現在の日本語は支配階級と知識人の共通語にすぎず、階級・身分的要素を除去して、大衆が容易に使える「民族語」にする必要がある。それには、まず漢字・カナを整理する必要がある、最終的にはローマ字化が必要であるというのが大島の考えであった。上記の抜粋にみえる簡略化された漢字（国・織）や、助詞の「は」を発音にあわせて「わ」と表記していることからもうかがえるように、「漢字・カナの整理」については『国際語研究』の編集で実際に試みていた。また、「民族語」の発展は、エスペラント語を核心とする「国際語」の形成に結びつくと思定された。だから、ローマ字化は既存のローマ字表記法にもとづくのではなく、エスペラント語の綴字法に合わせた、エスペラント式ローマ字化でなくてはならない、と大島は主張していた。

もちろん、「民族語」と「国際語」をつなぐ議論の前提には、大島自身がすでに翻訳していたスピリドヴィッチの段階論がある。スピリドヴィッチの『言語学と国際語』の結論部では、普遍語の形成過程で「国際補助語 [エスペラント] ——現在わヨーロッパ文化の言語だが——が東方民族の強大な影響お受ける時代が来る」との展望が示されていた⁽¹⁰⁰⁾。この部分を大島は積極的に解釈していたようにみえる。大島は、従来のエスペラント語がヨーロッパ的であるのに対して、「東洋の被圧迫民族語」をとおして、「国際語の非国際的なヨーロッパ的要素お批判し、国際語の必要とする新しい要素お民族語から与えなければならぬ」と主張する。日本語のエスペラント式ローマ字化の追求は、そうした展望から必然的に導き出されたものであった。同じ文脈で、大島はソ連のラテン文字化運動に強い関心を寄せ、先行する中国語・朝鮮語のローマ字化の進展にも注目していた⁽¹⁰¹⁾。前述の蕭三論説も方善境による中文重訳稿が公刊される前に、コルチンスキーのエスペラント語訳が日本語に重訳されて『国際語研究』（第3号、1933年5月）に掲載されていたのである。

上海世界語者協会の関係者のあいだで、『国際語研究』誌上の一連の記事が大きな示唆を与えていたことは疑いない。たとえば、『世界』第7号（1933年6月）の冒頭に掲載された葉籟士の論説「世界語与東方」は、日本・中国などの「東方」のエスペラント運動の成長は、エスペラント語が未来の世界共通語に発展する可能性を高めるとする。これはまさしく大島の所論を敷衍したものにほかならない。また、同論説にはドレーゼンの *Historio de la Mondolingvo* からの引用があるが、大島の部分訳（日本語）が先に『国際語研究』に掲載されており、これを参照した可能性が非常に高い⁽¹⁰²⁾。さらに、『世界』第8-9号（1933年8月）の「展望台」は、『国際語研究』で蕭三論説の日本語訳が掲載されたことも報じている。

新文字運動の始動は、このようにソ連と日本の言語理論を積極的に参照する、中国左派エスペラント運動の文脈のもとにあった。方善境による蕭三論説の訳稿「中国語書法的拉丁化」は、ようやく1933年8月に上海で『国際毎日文選』第12号として公刊された。そし

て、まもなく国内のエスペランティストのあいだで反響を呼ぶにいたった。モスクワを起点とした新文字の伝播における一事件としてこれを見るのでは、明らかに不足である。それは、急速に成長してきた左派エスペラント運動のひとつの達成であった。

中国の新文字運動はここに最初の一步を踏み出したといえるが、その後もエスペラント運動との密接な関係のもとで展開していく。『世界』の副刊『言語科学』が1933年10月に創刊されたが、理論的な内容をつかおうとともに、草創期の新文字運動の貴重なプラットフォームにもなった。左派エスペランティストの間で「言語科学」は、マルクス主義言語学を意味した。創刊号の巻頭文は、「国際的な言語科学理論、国際語理論、エスペラント学、および目下喫緊の課題となっている中国語のラテン化の問題について紹介する予定である」と述べる⁽¹⁰³⁾。「国際語理論」はスピリドヴィッチらが提示していた民族語から国際語（そして普通語）への段階論を意味するだろう。新文字運動は単独の課題ではなく、左派エスペラント運動の言語理論と結びついた課題として設定されていた。

『言語科学』に集うエスペランティストたちには、自分たちが言語学にかんしてアマチュアでありながらも、理論と実践の双方で研鑽しているという認識があった。そして、そうであるがゆえに、専門家の言語学者よりも「言語科学」をむしろ正しく理解し、言語の発展の趨勢を知悉しており、しかも実践によって発展を導けるという自負が生まれる⁽¹⁰⁴⁾。彼らはその自負ゆえに、理論的に正しいとされたローマ字化の運動を牽引していったと思われる。

また、蕭三論説は表記システムについて詳しくは紹介しておらず、先行するソ連の実践にかんするさらなる情報の入手が不可欠であった。そこで、『言語科学』創刊号はエスペラント語で告知をかけた、ソ連のエスペランティストに関連資料を送るよう呼びかけた⁽¹⁰⁵⁾。すると、まもなくソ連から、ラテン化新文字にかんする資料や教科書・辞書、新文字で書かれた文芸作品などが続々と送られてきたという⁽¹⁰⁶⁾。

それらの資料を主に提供したのが、やはりウクライナのエスペランティストたちであったことは注目に値する。一人は前述のコルチンスキーであるが、もう一人は V.P. イサエフというポルタヴァ（ウクライナ中部）を拠点として活動していた人物であった。彼の経歴には不明な点が多いが、資料とともに、“La Latinigo kaj Reformo de la Ĉina Skribsistemo en U.S.S.R.”（ソ連における中国語の書記法のラテン化と改革）と題した原稿⁽¹⁰⁷⁾も送ってきており、ラテン化新文字について以前から関心を寄せていたことがわかる。また、JPEUの機関誌『カマラード』にはロシア語を教えるかわりに日本語を教えてほしいとの通信希望を掲載しており、日本にも関心があったようである⁽¹⁰⁸⁾。他方で、イサエフは、ウクライナ語の表記法の改革とソ連のラテン文字化運動に関連する複数の記事をエスペラント語で発

表していた⁽¹⁰⁹⁾。ウクライナの 에스ペランティストにおける中国語に対する関心が、現地における書記言語の試みに結びついていたことをあらためて示唆している。

まもなくして、『言語科学』にはイサエフの上記の原稿が掲載されたが、同時に大島義夫の論考（日本語）の翻訳も連載されている⁽¹¹⁰⁾。大島はすでにスピリドヴィッチの議論を下敷きにした文章を相次いで発表していたから、特に注目されたのだろう。日本の左派 에스ペラント運動も、初期の新文字運動に影響を与え続けたといえる。

1934年なかばの大衆語論戦をへて、左派 에스ペランティストたちによって中文拉丁化研究会が上海で成立する。ラテン化新文字運動はついに軌道に乗るにいたった。それは、自らの言葉を構想する者たちが織りなした国際的なネットワークの一端であった。

結びにかえて

倪海曙は当初から資料の編纂にかかわり、運動の停止後も政府の言語政策にかかわったことで、誰よりも豊富に資料を利用して運動史を叙述できた。充実した資料に裏付けられているからこそ、『編年紀事』を中心としてその著作は参照され続けている。しかし、運動に参加している際には、資料編纂は運動の一部であり、運動の正当性を示す手段でもあった。また、人民共和国の普通話政策のもとでは、それに抵触する過去の運動の経緯は記述が困難になるか、歪められねばならなかった。倪の著作は、中国近現代史の他の基礎資料と同様に、記述の偏りをまぬがれぬものである。

しかし、ひとたび組み上げられた認識のフレームを解体するのは容易ではない。まして、それが豊富な資料群を背景としていれば尚更である。たしかに、歴史資料の整理とデジタル化の進展によって、倪が利用した多くの資料は、今日の研究者も容易に参照できるようになっている。その意味では、倪が有していた資料上の優位は低下したともいえる。だが、その編年史叙述の影響力はなお衰えていないようにみえる。瞿秋白の役割を十分に論証することなく強調したり、諸方言のローマ字化をめぐる動向を矮小化したりする記述は、近年の研究でも繰り返されている。本論文の前半部では、倪の編年史の著作について編纂の経緯をまず検討し、叙述の特徴と偏りを明らかにした。

倪の編纂作業によって覆い隠されていたのは、初期の新文字運動、とりわけ漢口・上海を拠点とした 에스ペランティストたちの活動である。彼らの活動は、国境を越えて展開された左派 에스ペラント運動の文脈においてはじめて理解できる。1920年代末以後、ソ連および日本に追隨して中国でも左派 에스ペラント運動が形成されていった。彼らは当初から 에스ペラント語のみならず、中国の言語・文字問題に関心を寄せていた。一方、ソ連（ウ

クライナ) と日本のエスペ란ティストたちには、言語の発展を展望しつつ、地域における書記言語の改革を試みる動向が存在した。中国の左派エスペ란ティストたちがそうした理論と実践に接続するなかで、ラテン化新文字の情報は中国に到達し、新文字運動も始動したのであった。

倪がモスクワから中国にいたる垂直的な運動史を構成したのに対して、エスペラント要因に注目することで、より水平的な、つながりの歴史が浮かび上がる。中国の新文字運動はもとよりその終端ではなく、さらに広い世界へと導かれていた。山形のエスペ란ティスト・斎藤秀一は、新文字運動の進展に着目し、葉籟士の論説を日本語に翻訳した。そして、標準語が「東京方言」に偏重していると批判しながら、日本語のローマ字化を主張している⁽¹¹¹⁾。さらに、白色テロ下の戦後台湾から日本に亡命した王育徳は、新文字運動の成果を参照して『台湾語常用語彙』を刊行した。そこには、植民地期に流通するようになった日本語由来の語彙を、「チャンボン語」として台湾語に包摂する軌跡が見出される⁽¹¹²⁾。自らの言葉を新たに構想する者たちは、それぞれの国境を越えて、たしかにつながっていた。

【付記】 本論文の一部は、「台湾とウクライナの歴史を架橋するために——今、なぜ『危険な言語』か?」と題して、第110回日本エスペラント大会プレ企画「研究者からみたエスペラントの歴史的意義」(2023年7月29日)にて報告したものである。当日、参加者からは多くの貴重な意見を頂戴した。また、企画を担当された日本エスペラント協会事務局の白井裕之氏からは、エスペラント文献の引用についても御意見を賜った。心より感謝申し上げます。

本論文は科学研究費補助金(23H00675)による研究成果の一部である。

略称の表記

ĈPEU 中国プロレタリア・エスペ란ティスト同盟

(Ĉina Proleta Esperantista Unio / 中国普羅世界語者聯盟)

IPE プロレタリア・エスペ란ティスト・インターナショナル

(Internacio de Proleta Esperantistaro)

JPEU 日本プロレタリア・エスペ란ティスト同盟

(Japana Prolet-Esperantista Unio)

SAT 国民性無き全世界協会

(Sennacieca Asocio Tutmonda)

SEU ソヴェト・エスペ란ティスト同盟

(Sovetrespublikara Esperantista Unio)

UEA 世界エスペラント協会

(Universala Esperanto-Asocio)

註

- (1) 陳原『語言与語言学論叢——応用社会語言学』台湾商務印書館、2001年、42頁。
- (2) 主な先行研究として、John DeFrancis, *Nationalism and language reform in China*, Princeton University Press, 1950; 倉石武四郎『漢字の運命』岩波新書、1952年; 大原信一『近代中国のことばと文字』東方書店、1994年; 藤井(宮西)久美子『近現代中国における言語政策——文字改革を中心に』三元社、2003年; 王東傑『声入心通——国語運動与現代中国』北京師範大学出版社、2019年; 湛小白『語文与政治——民国時期漢字拉丁化運動研究』河南人民出版社、2019年; 陳陽『区域的同一——民国時期左翼拉丁化新文字運動的方言視域』『史林』2021年第5期。
- (3) 以下、倪の経歴にかんする記述は特に断らないかぎり、葉籟士「倪海曙年譜」(倪海曙著作編輯小組『倪海曙語文論集』上海教育出版社、1991年所収)による。
- (4) ソ連領内の中国人労働者はシベリアに集中しており、その多くは中国北部(山東省・河北省・東三省)の出身であった。北京音ともやや異なる彼らの発音にあわせて創案されたため、「北方話ラテン化新文字」と称された。
- (5) 倪海曙編『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』知識出版社、1987年、130頁。
- (6) 陳原「六十年重温『世界』」『如歌的行板——陳原晚歲雜憶』商務印書館、2019年、96頁。
- (7) 一連の論考は、焦揚主編『陳望道文存全編』(第4巻、復旦大学出版社、2021年)に収録されている。
- (8) 倪海曙『春風夏雨四十年——回憶陳望道先生』知識出版社、1982年、12、21頁。
- (9) 倪海曙編『中国字拉丁化運動年表——1605-1940』中国拉丁化書店、1941年、1頁。
- (10) 前掲倪海曙『春風夏雨四十年——回憶陳望道先生』26頁。
- (11) ほぼ同様の一文が、以下の記事にみえる。雪帆(陳望道)「語文運動的回顧和展望」(『長風月刊』第1巻第1期、1940年1月)。ここでは、前掲『陳望道文存全編』第4巻所収の版を参照した(162頁)。陳と新文字運動の関係については、以下の論文も参照。浜田ゆみ「陳望道と言語・文字改革運動」『一橋論叢』第112巻第3号、1994年。
- (12) 倪海曙『拉丁化新文字運動的編年紀事 下』中国人民大学語言文字研究所、1979年、445、559頁。
- (13) 倪海曙「關於目前新文字運動中的幾個問題和今後上海新文字工作的計劃(在上海新文字工作者協會成立大会上的報告)」『時代』第25期、1949年9月、54頁。
- (14) 李行健「難忘王均先生」『讀書』2017年第7期、57頁。
- (15) 史萍青著、吳友根訳、杜松寿校閲「關於中国新文字歷史的一章(1928-1931)(上)」『文字改革』第9期、1962年、20頁。
- (16) なお、シュプリンツィンが同時に言及している周有光の文章は、倪海曙『中国拼音文字運動史簡編』にもとづいて記述されている。

- (17) 史萍青「1930年到1937年在蘇聯出版的北方話拉丁化新文字讀物的目錄」『文字改革』第21期、1959年。この時期のシュプリンツィンによる一連の論考は、倪海曙ら中国側からの依頼もあって書かれたようである。「蘇聯友人的来信」『文字改革』第16期、1958年。
- (18) 『編年紀事』の初稿は1957-58年には完成していたものの、64年頃まで改訂が繰り返された。シュプリンツィンの論考が発表されたのにもなって、その内容を組み込む作業をおこなったことが、改訂の大きな理由であろう。
- (19) 拓牧『中国文字拉丁化全程』生活書店、1939年、40-41頁；葉籟士「關於『全国新文字字母総表』」『社会生活』第1巻第1期、1936年6月、35頁。
- (20) 前掲史萍青「關於中国新文字歴史的一章（1928-1931）（上）」21頁；『編年紀事』73頁。
- (21) 黎錦熙『国語運動史綱』商務印書館、1934年、302頁。
- (22) 『1941年表』の1931年の欄（58頁）では、瞿の論説を引用したのち、以下のように記す。「この数文において、私たちははっきりした証拠を得られる。ラテン化中国文字は外国人が私たちにかわって作ったのではなく、趙元任の『国語ローマ字』と同様に、中国人が自ら創ったものである」。
- (23) 「第一次拉丁化中国字代表大会關於字母（龍同志）、写字規則（蒲同志）及在遠東中国人民中的言語政策（史同志）各報告的決議案」蕭三編『拉丁化中国文字拼音和写法的参考書』蘇聯新字母中央委員会、1932年、151頁（橋本萬太郎編『ラテン化新文字——資料集』文字と言語研究資料3、1978年所収）。
- (24) 「拉丁化新文字運動始末」（『編年記事』所収、12-13頁）は、ローマ字表記が考案された方言として、上海、蘇州、無錫、寧波、温州、広州、潮汕、客家、福州、厦門、湖北、四川、桂林、梧州の諸方言を挙げる。
- (25) 黎錦熙「国語『不』統一主義（上）」『文化与教育』第5期、1933年12月、2頁。
- (26) 胡愈之「新文字運動的危機（続）」『生活日報週刊』第1巻第10号、1936年8月9日、117頁。
- (27) 湛小白『語文与政治』100-101頁；陳陽「区域的同一」140-141頁。
- (28) 『編年紀事』137頁。
- (29) 上海新文字研究会「拉丁化中国字運動新綱領草案」1939年7月、7-8頁。
- (30) 宋陽（瞿秋白）「大衆文芸的問題」『文学月報』創刊号、1932年6月、4-5頁（邦訳：鈴木将久訳「大衆文芸の問題」大東和重・神谷まり子・城山拓也編『中国現代文学傑作セレクション——1910-40年代のモダン・通俗・戦争』勉誠出版、2018年、627-628頁）；宋陽「再論大衆文芸答止敬」『文学月報』第3期、1932年10月、26-27頁（邦訳：鈴木将久訳「再び大衆文芸を論じ止敬に答える」前掲『中国現代文学傑作セレクション』644-648頁）。
- (31) 関連する草稿を含む『乱弾及其他』（1938年）が刊行され、瞿の言語論が明らかになっていたことは、倪の議論の背景として重要である。新文字運動において瞿秋白が再発見される経緯については、以下の記事が参考になる。「瞿秋白是北方話拉丁化方案的最初起草人」『中国語文』第6期、1940年5月、95頁。この記事は、倪海曙編『反对拉丁化的十種「理由」』（化文出版社、1941年、4-6頁）に収録された。
- (32) 前掲倪海曙「關於目前新文字運動中的幾個問題和今後上海新文字工作的計劃」53頁。引用されている瞿の文章は、瞿秋白「羅馬字的中國文還是肉麻字中國文」（『乱弾及其他』霞社、1938年、182頁）にみえる。
- (33) ただし、公刊は遅れて、『語文現代化』第2輯（1980年）に掲載された。

- (34) 文中の以下の侃の記述は、過去の新文字運動にかんする弁明として読むことができる。「もちろん、当時の考え方はまだそこまで明確ではなかった。同時に、反動的統治の歴史的條件のもとにあって、極端に左傾化した意見や、主観的で偏った考え方、あるいは理想主義的な傾向が現れるのは避けられなかった」。侃海曙「推广普通話的歴史發展」『語文現代化』第2輯、1980年、234頁。
- (35) 前掲胡愈之「新文字運動的危機（続）」117頁。
- (36) 胡愈之「有毒文談」『語文』第1巻第3期、1937年3月、2頁；「対話録——走過的路」前掲陳原『如歌的行板』236頁。
- (37) 焦風（方善境）「關於國語羅馬字和拉丁化新文字」『政論』第1巻第5期、1938年3月、16頁。
- (38) 上海新文字研究会「拉丁化中国字新綱領草案」1939年7月、8頁。
- (39) ザメンホフによるエスペラント語の考案と、初期の運動の展開については、エドモン・ブリバー著、大島義夫・朝比賀昇訳『エスペラントの歴史』理論社、1957年。
- (40) 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史 新版』三省堂、1987年、23、125-128頁。初芝武美『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会、1998年、35、58頁。
- (41) 先行研究は、特にソ連によって牽引された1930年代の運動について、「プロレタリア・エスペラント運動」と呼称している。しかし、やはり先行研究がすでに指摘しているように、そこに含まれる思想・活動は多岐にわたっており、共産主義との関係が明確ではない団体・関係者も多数いたように見える。本稿では中立主義から離れたエスペラント運動の多様な動向をとらえるために、「左派エスペラント運動」という呼称を採用する。「プロレタリア・エスペラント運動」については、三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡』リバーロイ社、1995年、40、49-50頁。
- (42) ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳『危険な言語——迫害のなかのエスペラント』岩波新書、1975年、134-139頁；Peter Glover Forster, *The Esperanto Movement*, The Hague: Mouton, 1982, pp. 190-194; Ulrich Lins, *La Danĝera Lingvo: Studo pri la Persekutoj kontraŭ Esperanto*, Rotterdam: UEA, 2016, pp. 141-146.
- (43) 前掲大島・宮本『反体制エスペラント運動史 新版』162-164頁；前掲三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡』第5章。
- (44) 本段落の経緯については、以下を参照。前掲リンス『危険な言語』143-147頁；前掲 Forster, *The Esperanto Movement*, pp. 199-200. 前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, pp. 175-179.
- (45) 前掲三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡』58頁；「ポエウの旗は進む 1931年度に於けるポエウ活動の決算」『カマラード』12月号、1931年12月、41頁。
- (46) エ・ドレーゼン著、高木弘（大島義夫）訳『エスペラント運動史』鉄塔書院、1931年9月。
- (47) 前掲リンス『危険な言語』182頁；前掲大島・宮本『反体制エスペラント運動史 新版』174頁。前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, pp. 256-257.
- (48) 前掲リンス『危険な言語』183-184頁。
- (49) 漢口世界語学会および方の経歴については、方善境「我与世界語」方善境紀念文集征集委員会編『方善境紀念文集』1984年。
- (50) 「書報紹介」『希望』第1巻第2期、1930年2月、6頁；「台湾鄭飛民君来信」『希望』第2巻第2期、1931年2月、7頁。

- (51) 方善境、傅璧城「海上来鴻——上海世界語運動的現状」『希望』第1巻第4期、1930年4月。
- (52) 子京、傅平「我們為什麼作世界語運動」『希望』第1巻第1期、2-3頁。
- (53) 『希望』第1巻第3期、1930年3月
- (54) 『希望』第1巻第11期、1930年11月
- (55) 「300412 致方善境」『魯迅全集』第12巻、人民文学出版社、2005年、230頁。
- (56) 前掲三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡』43頁。
- (57) 前掲方善境「我与世界語」4頁。
- (58) 「Dankesprimio」『希望』第2巻第12期、1931年12月、8頁；方善境「排斥外国語問題和世界語」『希望』第1巻第12期、1930年12月、4頁。
- (59) 侯志平、鄒国相編『世界語在中国一百年』中国世界語出版社、1999年、89頁；「Nia Manifesto」『希望』第2巻第10期、1931年10月。
- (60) 「Eĥoj de la Mondo」『希望』第3巻第1-2期、1932年2月；「Eĥoj de la Mondo」『希望』第3巻第3-4期、1932年4月；湯遜安「抗戦前『漢口世界語学会』の興亡（続）」『世界』第29期、1985年、9頁；堀泰雄『1930年代を生きたエスペランティストたち』ホリゾン出版、2022年、87頁。
- (61) 「最近關於世界語宣言」『希望』第2巻第11号、1931年11月；E. Drezen 著、傅平訳「Zamenhof」『希望』第2巻第12号；E. Drezen 著、璧城訳「柴門霍夫与託爾斯泰」『希望』第2巻第12号。
- (62) “Nova Kolono en Nia Fronto: Fondigis la Ĉina Prolet-Esperantista Unio”, *Internaciisto*, No. 32, Januaro B, 1932, p. 10.
- (63) 葉籟士「回憶語聯——三十年代的世界語和新文字運動」『新文学史料』1982年第2期；張企程「關於中国普羅世界語者聯盟的一些回憶」中国人民政治協商会會議全国委員会文史資料委員会編『文史資料選輯』第46輯、2001年；前掲方善境「我与世界語」6頁。
- (64) 胡愈之とエスペラント運動のかかわりについては、侯志平編『胡愈之与世界語』中国世界語出版社、1999年。胡は、モスクワ訪問を通じて幹部反対派への支持を固めていた。Hujucz (胡愈之), “Al la Tuta Satanaro”, *Internaciisto*, No. 11, Marto A, 1931, p. 86.
- (65) 前掲張企程「關於中国普羅世界語者聯盟的一些回憶」185-187頁。
- (66) 前掲葉籟士「回憶語聯——三十年代的世界語和新文字運動」189-190頁；前掲張企程「關於中国普羅世界語者聯盟的一些回憶」188頁。
- (67) *La Nova Etapo* については、以下を参照。前掲リンス『危険な言語』148頁。
- (68) 前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, p. 209; “Elektoj”, *Bulteno de Centra Komitato de Sovetrespublikara Esperantista Unio*, No. 17-18 (112-113), p. 141, Decembro, 1931; 高木弘 (大島義夫)「エスペラント理論の発展」『Esperanto-Lernanto』第2年第5号、1934年5月、34頁。
- (69) E. スピリドヴィッチ著、高木弘 (大島義夫)・井上英一 (山崎不二夫) 訳『言語学と国際語』日本エスペラント学会、1932年9月 (ロムニブーン社、1976年復刻版を参照)。この訳書はのちに中文に重訳された。斯皮義多維奇著、孫伯堅訳『言語学与国际語』辛壘書店、1935年。
- (70) 前掲スピリドヴィッチ『言語学和国际語』140頁；前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, pp. 217-218. マル学説の新文字運動に対する影響については、近年の研究でも着目されている。前掲 湛小白『語文与政治』83頁；前掲陳陽「区域的同一」134-135頁。

- (71) スピリドヴィッチは、言語が発展とともに人工性が高まると展望したほか、習得の容易さを背景として大衆的・集団的に創られてきたエスペラントこそ、普遍語の胚芽であると認識していた。その結果、言語の段階論において、エスペラント語には非常に大きな意義が与えられていた。前掲スピリドヴィッチ『言語学と国際語』103頁。
- (72) Ernest Drezen, *Historio de la Mondolingvo*, trad. Nikolao Hohlov kaj Nikolaj Nekrasov, EKRELO, 1931, pp. 229–230. (邦訳：ドレーゼン著、高木弘（大島義夫）訳『世界語の歴史』日本エスペラント学会、1934年、438頁）。
- (73) スピリドヴィッチの議論にかんする論争については、La Redakcio, “Marksisma Lingvoscienco Turnas Sin Vizaĝe al la Problemo pri Lingvo Internacia”; “Tezoj pri Internacia Lingvo”, *La Nova Etapo*, Kajero 3, 1932. (邦訳：「モスコウ言語科学研究所の国際語に関するテーゼ」『国際語研究』創刊号、1933年）。
- (74) 前掲史萍青「關於中国新文字歴史的一章（1928–1931）（上）」21頁。
- (75) E. Sjao (蕭三), “La Alfabeto de l’Ĉina Revolucio: Latinigo de Ĉina Skribo”, trad. V. Elsudo (Viktoro Kolĉinski), *La Nova Etapo*, Kajero 2, 1932, p. 83.
- (76) 焦風（方善境）「三十年代中国世界語者介紹拉丁化新文字的一点回憶」『文字改革』1963年、第11–12期、29頁。いわゆる「ハリコフ会議」の記録については、栗原幸夫編『資料世界プロレタリア文学運動』第4巻（三一書房、1973年）。採択された「植民地における革命文学の問題に関する決議」には、「多くの国で、古いアルファベットが支配階級、およびそれに仕えるインテリゲンチヤ、僧侶階層の特権となっており、広汎な人民大衆の財産となりにていないことにかんがみ、革命文学の新しい武器たる新しいアルファベットを創り出す必要がある」との一文がある（153頁、桑野隆訳）。蕭三はこの会議に中国代表として出席し、報告していた。阮芸妍の研究によれば、会議の全貌を伝える国際革命作家同盟の機関誌『世界革命文学』は、ようやく1932年4–5月頃に中国に到達したという。「共振与時差——1930年前後『左聯』的国际連帯」『文学評論』2017年第4期、151頁。
- (77) 民国期に新聞記者として活躍した戈公振は、蕭三論説の中文訳稿が公刊される以前の1933年3月にソ連に渡った。そして、35年の帰国の際にラテン化新文字が中国にすでに伝わっているとは知らず、新文字にかんする多数の資料を持ち帰ったという。もし、戈の資料によって新文字の詳細がはじめて中国に伝わっていたのであれば、運動はエスペランティスト以外の人びとによって異なった形態で推進されたであろう。なお戈の資料は、のちに遺族によって倪海曙に寄贈された。本社同人「戈公振先生与拉丁化」『生活知識』第1巻第3期、1935年11月、100頁。『編年紀事』、100頁。
- (78) Bambuo（栗栖継）「ハリコフ・エスペラント界の人」『Marŝu』第1巻第5–6号、1935年6月、5頁。
- (79) “SEU Reprezentantas 42 Naciojn!”, *Bulteno de Centra Komitato de Sovetrespublikara Esperantista Unio*, No. 10 (123), 1932, p. 71.
- (80) V. Elsudo (Kolĉinski), “Krei Novan Anaron”, *Internaciisto*, No. 25–26, Oktobro A-B, 1931, p. 210.
- (81) S. Ŝtejn, V. Kolĉinski, “Ni Alvokas Helpi la Disvolvon de Esperanto-Movado en Oriento”, *Bulteno de Centra Komitato de Sovetrespublikara Esperantista Unio*, No. 2 (97), 1931, p. 16.
- (82) 「何百万人が同じやうに……——何故七十五の老人がコルホーズにはひつたか」『カマラード』1932年5・6月号：「蘇聯来信」『普羅世界語通信』第1号、1932年；前掲堀泰雄『1930

- 年代を生きたエスペランチストたち』196-197頁。
- (83) Kolčinski, “Tra la Ukrainia Esperanto Movado: Esperanto en Ukrainiaj Centraj Proletaj Organizoj”, *Internaciisto*, No. 2, Novembro A, 1930, p. 14; U. K. de SEU, “Ekfunkciis”, *Internaciisto*, No. 8, Januaro B, 1931, p. 62.
- (84) ソ連における中国語のローマ字化の創案・普及には、将来的な中国への共産主義の扶植を企図した側面があった。Terry Martin, *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*, Cornell University Press, 2001, p. 199. (邦訳：テリー・マーチン著、半谷史郎・荒井幸康・渋谷謙次郎・地田徹朗・吉村貴之訳『アフエマティヴ・アクションの帝国——ソ連の民族とナショナリズム、1923年～1939年』明石書店、2011年、249頁)。
- (85) 原文は下記のとおりである。“La vortoj de niaj ĉinaj kamaradoj pri la tonoj havas gravan valoron por ni, esperantistoj, ĉar ĝuste la sama argumento (ĉina lingvo havas specilajn tonojn) estis elŝovita plurfoje de marksanaj kamaradoj (ekz. de k-do Skripnik en artikolo «Kun-proksimiĝo kaj kunfandiĝo de nacioj en epoko de socialismo»)) kontraŭ esperanto, kiel lingvo tro fremda al la strukturo de l’ orientaj lingvoj.” E. Sjao, “La Alfabeto de l’Ĉina Revolucio: Latinigo de Ĉina Skribo”, p. 82.
- (86) Martin, *The Affirmative Action Empire*, p. 205. (邦訳：前掲テリー・マーチン『アフエマティヴ・アクションの帝国』255-256頁)；前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, p. 214.
- (87) エスペランティストによるウクライナ語のローマ字化の追求については、以下を参照。Lins, *La Danĝera Lingvo*, p. 251.
- (88) “Libro Recenzejo”, *Internaciisto*, No. 52, Decembro B, 1932, pp. 123-124.
- (89) “Sur la Lingva kaj Literatura Fronto”, *Bulteno de Centra Komitato de Sovetrespublikara Esperantista Unio*, No. 17-18 (112-113), 1931, p. 140.
- (90) 前掲 Lins, *La Danĝera Lingvo*, p. 220.
- (91) *Bulteno de CK SEU*, No. 9 (134), Aprilo 15, 1933, p. 72.
- (92) コルチンスキーの実験は、スピリドヴィッチらの言語理論の実践を単純に試みたというよりは、現地社会の言語状況への応答としても理解すべきだろう。1920年代なかばからウクライナでは、言語のウクライナ化政策が推進されたが、公的機関や工場におけるロシア語の優位は崩れなかった。公共空間ではウクライナ語とロシア語の二言語併用が常態になりつつあったという。特に、ハルキウをはじめとする都市部では、ウクライナ語の普及政策が順調に進まない傾向にあり、政策は1930年頃には停滞していたという。Martin, *The Affirmative Action Empire*, pp. 99-101, 122. (邦訳：前掲マーチン『アフエマティヴ・アクションの帝国』134-137、160頁)。
- (93) 焦風（方善境）「大衆文芸的先決条件」『武漢文芸月刊』第2巻第1期、1932年8月、4-5頁。方は瞿秋白が執筆した二本の論説（宋陽「大衆文芸的問題」『文学月報』創刊号、1932年6月；史鉄児「普洛大衆文芸的現実問題」『文学』第1巻第1期、1932年4月）に接して、記事を執筆した。それらの論説ではローマ字の採用は主張されていない。しかし、矛盾の批判に応答して発表された宋陽（瞿秋白）「再論大衆文芸答止敬」（『文学月報』第3期、1932年10月、26-27頁）ではローマ字の導入を示唆している。(邦訳：鈴木将久訳「再び大衆文芸を論じ止敬に答える」前掲『中国現代文学傑作セレクション』644-648頁)。
- (94) 前掲焦風「大衆文芸的先決条件」「大衆文芸的先決条件」9-10頁。

- (95) 前掲葉籟士「回憶語聯——三十年代的世界語和新文字運動」198頁。
- (96) 前掲葉籟士「回憶語聯——三十年代的世界語和新文字運動」194頁。
- (97) たとえば、『世界』第2号・第3-4号では、中級講座の教材として秋田雨雀“Esperanto Movado en Sovet-rusio”が採用されている。以下の記事からの抜粋であった。秋田雨雀「ソヴェトロシヤに於けるエスペラント運動」『エス語研究』第3巻第9号、1928年9月。
- (98) 「你可知道…?」『世界』第3-4号、1933年3月、2頁；エ・ドレーゼン著、高木弘（大島義夫）訳『エスペラント運動史』鉄塔書院、1931年；ドレーゼン著、梶弘和訳『階級的イデオロギーを通じて見たるザメンホフ』エスペラント研究社、1930年。*Historio de la Mondolingvo*の部分訳は、『世界』第3-4号、第7号、第10号で連載されている。
- (99) Ernest Drezen, *Historio de la Mondolingvo*, pp. 22, 229. 訳文は、以下の邦訳を参照のうえ、若干の修正を加えた。前掲ドレーゼン著、高木弘（大島義夫）訳『世界語の歴史』32、438頁。
- (100) スピリドヴィッチ『言語学と国際語』149頁。
- (101) 高木弘「言語問題の階級的意義」『国際語研究』創刊号、1933年1月、16、19頁。
- (102) ドレーゼン著「現在の Esperanto、将来の国際語と世界語」『国際語研究』第2号、1933年3月、5頁。*Historio de la Mondolingvo*の全訳は翌年、ドレーゼン著、高木弘訳『世界語の歴史』（日本エスペラント学会、1934年）として刊行された。
- (103) 「創刊詞」『言語科学』創刊号、1933年10月、1頁。
- (104) 同上。Ĵelezo（葉籟士）「大衆語運動和世界語者」『世界』第2年第9号、1934年9月、41頁。
- (105) 『言語科学』創刊号、1933年10月、1頁。
- (106) 葉籟士「回憶語聯——三十年代的世界語和新文字運動」199頁。
- (107) 『言語科学』4号（1934年1月）、5-6号（1934年3月）に掲載されたのち、岡林による中文訳「蘇聯各民族文字的拉丁化与漢字書法拉丁化」が『中華日報』副刊「動向」（1934年8月2日、3日）に掲載された。
- (108) 「通信欄」『カマラード』1932年1月号、23頁。コルチンスキーの活動を補助する立場にあった人物なのかもしれない。斎藤秀一が編集していたエスペラント語雑誌 *Latinigo* の創刊号（1937年）に、コルチンスキーの記事“Ĉu en Sovetio Oni Latinigas la Dialektojn?”が掲載された。続く第2号（1938年）では、コルチンスキーの誤りを訂正するイサエフからの連絡が掲載されている（41頁）。なおコルチンスキーの記事は、そもそも葉籟士の質問に回答するために執筆されたものであった。下記の邦訳が存在する。仁木茂訳「ソヴィエトの諸方言もローマ字化するのか」『社会言語学』第18号、2018年；小金井真理子訳「訂正（イサエフによる）」『社会言語学』第19号、2019年。
- (109) “Nova Reformo de la Ukraina Ortografio”, *Scienca Gazeto*, No. 5 (17), Septembro-Oktobro, 1934. (邦訳：Forĝi-Sin 訳「ウクライナ綴字法の新改革」『国際語研究』第11-12号、1935年2月)。“La Resumo de Sovetia Laginiga Movado”, *Latinigo*, No. 2, Marto, 1938. (邦訳：小金井真理子訳「ソヴィエトのローマ字化運動概略」『社会言語学』第19号、2019年)。
- (110) 高木弘（大島義夫）著、索原（葉籟士）訳「国名接尾語問題」『言語科学』第4号、1934年1月；高木弘著、索原訳「言語科学与世界語」『言語科学』第5-6号、1934年3月；高木弘著、石均訳「世界語語原概観」『言語科学』第5-6号、1934年3月；高木弘著、索原訳「言語の本質与起源」『言語科学』第7-8号、1934年5月。

- (111) 斎藤秀一「エスペラントとローマ字化との関係」『国際語研究』第16号、1936年7月、113頁。
- (112) 都留俊太郎「台湾語——王育徳における大衆と『チャンポン語』」駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」——〈冷戦〉と〈越境〉の1950年代』岩波書店、2020年。